
魔弾の射手の弾丸は何処に？

緑一色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔弾の射手の弾丸は何処に？

【Nコード】

N0526Q

【作者名】

緑一色

【あらすじ】

21XX年12月8日。第三次世界大戦勃発。アメリカ、イギリス、ロシア、中国などの強豪国を破り勝利したのはサムライの国日本だった。

初の学園物です。未永く見守ってください

題名変えました。

元・魔弾の射手と素晴らしき世界です

21XX年12月8日(前書き)

初の学園物スタート!!

妖怪退治が主流になると思います

21XX年12月8日

21XX年12月8日。何の因果か真珠湾攻撃と同日、第三次世界大戦勃発。

ロシア、アメリカ、イギリス、中国等の強豪国を退け戦争に勝利したのはサムライの国日本だった。

日本は火器を全く使わずにこの戦争で勝利し、多大な領地を手に入れた。

なぜそんなことが可能だったのか？

それは相手国にも日本国民にも知る者は少ない。

11年後・・・

日本中の至る学校にある組織が置かれた。その名もNo ? a l u e。

略してN?と呼ばれている。

その概要は謎に包まれており、今や都市伝説と化している。

「ってね、そんなに大したものじゃないってのに」

そう言って指で鍵をクルクル回している少女は津田佳奈^{つたかな}。

髪型は黒髪のショートヘアで服装は飯島高校の制服のセーラー服。

世間一般的な物で探せばどこにでもありそうである。

パツチリと開いた大きな目はどこか宙を見ている。

「佳奈はあの化け物を焼いてるだけなのに」

「それだそれ」

黒髪の相棒の少年は欠伸をして返す。

少年の名は鎌田龍樹^{かまたりゅうき}。

同じく服装は飯島高校の男子の制服である夜の闇に溶けていきそう

なほどの黒の学ランに黒のズボン。
顔はかつこいいわけではないがかとって醜くもない。
要するに中の中である。

「何で！？あの化け物を焼くことのどこが？」

「俺が言いたいのはそんな口調で話す女がいるから政府も大っぴらにできないってことだ」

「ひどーい！！まるで佳奈が女じゃないみたいじゃん」

「みたいじゃなくてその通りだ。………つと、ここか」

佳奈から鍵を奪い取り、龍樹は目の前の建物の扉を開けた。

建物は今では廃部となった飯島高校野球部の部室だ。

扉を開けた瞬間、子犬くらいの大きさの生物がキイツと金切り声を上げながら龍樹に飛びかかってきた。
龍樹は驚きながらもそれをかわした。

「危なっ」

「やっぱし、ゴブリン。でも何で外国のが？」

不思議そうにそう呟いて佳奈はゴブリンの首を掴み、持ち上げた。

ゴブリンはじたばたと手足をばたつかせている。

突如、ゴブリンの体は炎に包まれた。

ゴブリンは身を焼かれ、消し炭となった。

「よし、仕事終わり。龍樹、帰りに何かおごって

「肉まんならな」

そう言って二人は野球部部室を後にした。

あとは部室前に炭化したゴブリンが残されていただけだった。

帰り道、佳奈は龍樹に尋ねた。

「ねえ、あれは何をしたの？」

「別に何もしてねえんじゃねえ？何だ今頃同情か？」

「それもちよつとね。ただ可愛かったからちよつと飼ってみたかったな〜って」

「悪趣味な奴だ」

「あつ、コンビニ。早く肉まん肉まん！」

龍樹の苦言を無視して、佳奈は一人でコンビニに走って行った。龍樹も渋々後を追った。

すると、コンビニから出てきた佳奈が叫んだ。

「やっぱあんまんにしていい？」

「好きにしる！」

七人ミサキ(1) 〱飯島高校の日常〱 (前書き)

作中のM102BはM92Fで

mac15はmac11のイメージです。

七人ミサキ（1）～飯島高校の日常～

高校2年生の鎌田龍樹は飯島高校2-Cで宿題に没頭していた。

「よう、リユーちゃん。今頃宿題か？」

そうやって龍樹の肩に手を乗せた軽い雰囲気このみやうきの少年は二宮耕治。

耕治は龍樹と中学からの親友である。

といっても、その仲は複雑なものだが。

「まあな。昨日も駆り出された」

「またお化け退治かよ。大変だな正義の味方も」

龍樹がじろりと耕治を睨んだ。それを見て耕治はバツが悪そうに続けた。

「分かってる。リユーちゃんのことには誰にも言わんさ。大体、俺自身あのことが無ければリユーちゃんのことなんか絶対分からなかつたぜ？」

「そうしてくれ」

龍樹がそう言葉を返してからすぐの事だった。

何人かの男子生徒が龍樹と耕治を取り囲んだ。

逃げられないように四方八方を塞いでいる。

リーダー格の少年が口を開いた。

「勉強か？真面目くーん」

「あちゃあ、高田君ご一行か」

耕治はおどけながらそう言った。

リーダー格の少年・・・高田は拳銃を龍樹のこめかみに突きつけた。
「そういう真面目な態度、俺大嫌いなんだよね」

高田とその一味はクククツと笑いだした。

他のクラスメイトはそこから一気に距離を置いた。

「あつそ。だから留年するんだろ、苦学生」

ちなみに、高田は本来もう3年生のクラスにいるはずの年齢である。

龍樹は高田に目も向けずに計算式を解き続ける。

その澄ました態度に対して、高田は激昂した。

「てめ、俺は撃てる男だぞ？おい！」

「・・・・・・ M102B。M92Fの改良に改良を重ねた結果がこれか。ベレッタの名も随分と落ちたな」

龍樹は冷静に銃の分析をしてそのままの調子で続けた。

「どうでもいいが安全装置セーフティくらい外したらどうだ？」

「なっ・・・・・・」

高田が自らの愛銃を顔に寄せたのを龍樹は見逃さなかった。

龍樹は愛銃のグロック17学生カバンから取り出し、高田の額に突きつけて引き金を引いた。

乾いた音が教室中に鳴り響く。

クラスメイト全員が口をポカンと開けている。

唯一、無表情なのは龍樹と耕治くらいのもだろう。

当の高田は白目を剥き、大口を開けて倒れ込んでいる。

「あー、空砲空砲。先生には適当に言っといて。あとその部下達はそいつ席に座らして」

パンパンと手を叩きながら耕治は場を仕切り始めた。
発砲音を聞いて駆けつけてきた教師に1人の男子生徒が嘘の説明を始めた。

部下達は負け惜しみを呟きながら高田を席まで引きずって行った。

「悪いな」

「良いつてことよ。俺はサポートでさ」

「人望はお前の方があるだろ？」

「もうちょい口数増やせばリユーチゃんだって・・・」

担任の男性教師が教室に入ってきたのを見計らって耕治は自分の席に戻った。

担任が空砲を撃ち、生徒達に黙るように促した。

銃刀法。それは戦後の日本では完全に死語だった。

今や小学生でも防犯ブザー代わりにサバイバルナイフとmac15
で武装する。

そんな世の中である。

「ねえ、鎌田君」

「ああ？」

龍樹は2限目の後の昼寝の時間（個人的なもの）が何よりも好きである。
それを邪魔されたからか口調もきつくなっている。

「鎌田君は妖怪の居場所って知ってる？」

質問の主は龍樹の同学年の三沢恵子みさわけいこだった。

恵子は学年で一番背が低いので一部の男子から強烈な支持を受けている。

もちろんロリコン的な意味でだ。

もっとも龍樹はそんなことには興味は無い。

ただ単にクラスでも浮いてる存在の自分にそんなことをなぜ聞いたのか驚いた。

「知ってても教えねえよ。んな危険な場所」

「そっか……………」

「何で俺に聞いたんだ？お前、もっと仲良くてそういう情報に敏感な友達いるだろ？」

「でも、佳奈ちゃんが鎌田君は詳しいって言ってたから」

「あの馬鹿……………」

そう言って龍樹は頭を抱えた。

去っていく恵子に龍樹は声をかけた。

「お袋さんの命日だったな。今日」

恵子が足を止めて振り返らずに答えた。

「覚えててくれたんだ。ありがとう」

「まあな。1年の時、結構衝撃的だったからよ」

「うん。あの時はごめん」

「親が死んだら泣くのが普通だ。あそこで異常だった（……………）のは俺だけだ」

恵子はその言葉に何も返さず無言で教室から出て行った。

その背中は少し悲しげだった。

七人ミサキ（2）〜恵子の回想と裏山〜

恵子は泣いていた。今は動かなくなった母の目の前で。

恵子は泣いていた。大勢のクラスメイトと親族の目の前で。

一人の少年が声を発した。

「たかが人が一人死んだ。何が悲しいんだ？」

恵子は睨んだ。少年の顔を。

恵子は怒りのあまり母の位牌を投げつけた。少年に向かって。

少年は頭から血を流しているというのに無表情だった。恵子はまた泣いた。

「山羊の頭、猿の脳、狐の尾……」

恵子は薄暗い部屋のテーブル一面に置いてある物の名称を復唱していった。

「あとは……」

恵子はパソコンの画面に目を移した。

「妖怪の肉だけ」

恵子は様々なおどろおどろしい物の前で泣き始めた。

「お母さん、待ってて。あとちょっとだから……あとちょっと」

三沢恵子は物心ついた時から父の顔を知らない。

母親一人に育てられてきた。

兄妹はおらず、母は恵子を目に入れても痛くない程可愛かった。

そうやって恵子はすくすく成長していった。

しかし、娘の成長に比例して母の苦勞は増える一方だった。

その為、母は朝から晩まで休まず働いた。

いずれ体も心も壊れるのは誰の目から見ても明らかだった。

そして、母は恵子が高校1年生の6月、しとしとと雨の降る日に心不全で亡くなった。

――放課後・帰り道――

「で、恵子ちゃんにちゃんと教えてあげたか？色男」

そう言つて佳奈は龍樹の頬を突いた。

だが、龍樹は何の反応も示さない。

後ろから耕治は声をかけた。

「多分教えてないだろうなー。こいつ硬派だから」

「教える必要が無い。大体、そんな危険な事教えるか」

少し気難しい声で龍樹は言った。

「大丈夫だよ。今この辺そんなにヤバいのいないし」

「っと」

耕治は慌てて耳を塞いだ。

その手の話は聞くなと龍樹に釘を刺されていたからである。

「それでもこいつみたいに俺らの事がバレると厄介だろ」

「耕治もN？入ったら？」

耕治は大げさに首を横に振った。

「……耳塞いだ意味ねえだろ」

「うつ……さーて、じゃ、じゃあ俺はこの辺で。バイバーイ」

耕治は逃げるように10m先の路地を曲がって走って行った。

「耕治本当は入りたいたらうね」

「そうだろうな……と、メールだ」

龍樹は携帯を開き、メールの確認を始めた。

15秒もしないうちに佳奈の携帯にもメールが届いた。

「ふーん。今度は泥田坊だつてさ」

「あの人のメールの早打ちは異常だな」

「何で？一斉送信したんじゃないの？」

「俺の方には裏山に厄介なのが出たから人払いをしろだと」

「厄介なのつて？」

「ミサキ」

「あららら……ドンマイ」

そんな話をしながら二人が辿り着いたのはN?専用の寮。

裏・風紀委員の存在は政府から認定されている。

だが、その支援は微々たるものである。

よって、部屋は1DKの簡素なものになっている。

寮の部屋は全部で8つ。

6つは使われていて残り2つは空き部屋である。

そして、使われている部屋の内の2つは佳奈と龍樹のものである。
佳奈と龍樹はそれぞれの部屋へと入って行った。

七人ミサキ(3)〜長い夜〜

その日の夜、龍樹は裏山での仕事を終え、木陰で一息ついていたところだった。

「はあ、疲れた」

龍樹の仕事は裏山の人払い。

面倒そうな仕事に聞こえるが作業自体は至って簡単だ。

全部で9つの『熊が出たので今日から4日間山に入らないでください』と書かれた立て札を入口も含め人が入れそうな所に立てるだけの仕事である。

「あとは、中を適当に巡回すれば文句は言われないうだろ」
そう呟き龍樹は自分で立てた立て札の文句を無視して山へと踏み込んでいった。

「あいつ、何してやがったんだ？」

高田は龍樹が山に入って行くのを陰から見届けた。

そのまま龍樹が先ほどまで休んでいた木陰に高田は近づいた。

「熊？こんな看板立てるだけのバイトあるのかよ」

高田は看板を蹴り倒し、一人でニヤけた。

「まあどうでもいい。俺に恥かかせたあいつだけは許せねえ。殺してやる」

高田は腰のM102Bに手を掛け、龍樹を追った。

龍樹は山道を通り巡回を始めた。

当然、一般人の被害を少しでも減らす為である。

前を懐中電灯で照らしながら歩いていると茂みに何かいるのが分かった。

龍樹はヒップホルスターからグロックを抜き、茂みに向かって3発撃った。

「ひゃあああああっ！！！」

茂みから悲鳴を上げながら龍樹の良く見知った人物が飛び出してきた。

「何やってんだ？」

「あ………鎌田くん」

恵子は龍樹に表情の固い笑みを見せた。

ため息をつき、龍樹は恵子に再度尋ねた。

「もう一度聞こう。何やってんだ？ここは今、立ち入り禁止だぞ」
「鎌田くんこそ何やってるの？」

「俺は………バイトだ」

相変わらず嘘を吐くのが下手な男だ。
そう思い、龍樹は自嘲気味に笑った。

しかし、恵子はそれで信じてくれた。

「そっか。………ごめん鎌田くん。見逃してくれない？」
「何でだ？こんなところに何の用がある？」
「そ、それは」

その時だった。

シャン シャン シャン

全部で七つの鈴の音が龍樹の背後から聞こえてきた。

「やばい。三沢、ちょっと隠れてろ」

「えっ何？何なのこの音」

「いいから向こう向け！」

しかし、恵子は何かに気付くと茫然とした表情で龍樹の背後のある一点を見つめている。

シャン シャン シャン

鈴の音はすぐ後ろに迫っていた。
龍樹はゆっくりと振り向き、音の方向を照らした。

シャン

そこには七人の山伏がいた。
いや、山伏の恰好をしたものたち（・・・）がいた。

これが七人ミサキだということは例えその存在を知らぬ者でもわかるだろう。

服装は至って綺麗だったが顔は肉が爛れて骨が所々見えているのがほとんどである。

列の一番後ろの損傷が一番少ないミサキが声を上げた。

「ミサ・・・ワー・・・カ・・・マ・・・
ター!!」

「高田!?!何であいつが」

「ねえ、何なの鎌田くん。何で高田くんあんな恰好してるの?」

今にも泣きだしそうな声で恵子は龍樹に尋ねた。

その問いを無視して龍樹は学生カバンからショットガン、ソードオ
フのM870を出し、すぐそこまで迫っていた七人ミサキの行列の
先頭のミサキに片手撃ちで一発。

ミサキの腹に風穴が開き、先頭のミサキは後ろに倒れ込んだ。

それによって後ろを歩いていたミサキを将棋倒しの要領で次々倒れ
た。

「逃げるぞ!!」

恵子の返事も待たずに龍樹は彼女の手を取り、その場を離れた。

七人ミサキ(4)商品名ザミエル

龍樹と恵子は七人ミサキから出来る限り離れた場所で座り込んでいた。

落ち着いてからまず恵子が龍樹に尋ねた。

「あれは何なの？妖怪ってことは分かるけど」

「七人ミサキ。常に七人組で行動し、人間を見つけると追いかけてくる」

「それだけ？」

「な訳ないだろ。捕まったら即死亡。一番先頭のミサキが消える代わりに一番後ろに捕まった人間がミサキとして並び彷徨い続ける。全く面倒な奴らだ」

そう言つて龍樹はM870のスライドを引き、空薬莖を排出してから12ゲージ弾を一発込めた。

恵子は龍樹の説明で高田が何故あそこにいたかを理解した。

不安そうな表情の恵子を見て龍樹は続けた。

「大丈夫だ。鈴の音で向こうの位置は分かるし奴らはのろい」

「そっか……もう一ついい？」

「何だ？」

「何でそんな古い銃使ってるの？」

「俺の悪友が好きなんだよ。レトロな銃」

これは半分嘘で半分本当である。確かにN?の副委員長はレトロな銃が好きでよくそれに関する物を作ってくれたりする。

もっともこれは副委員長がレトロな銃しか改造したくないというわがままのせいだが……。

だが、銃そのものは業者から買っている。

前にも述べたように裏・風紀委員への援助は少ない。

よって、単純に安い旧式のものを使っているといった次第である。

今度は龍樹が尋ねた。

「じゃあ今度は俺の番だ。何しに来た？こんなところに」

恵子は一瞬、躊躇ったがやがて淡々と語り始めた。

「分かった。言うよ。……お母さんを生き返らせるんだ」

「人体生成か」

「そう」

人体生成。

古来から妖怪には不思議な力が備わっていると信じられてきた。有名な所でいけば、人魚の肉を食べれば不老不死になれる等、たくさんさんの逸話が残っている。

その妖怪の肉を使って死んだ人間を生き返らせるという話を龍樹も聞いたことがある。

「そんなもの本気で信じてるのか？」

恵子はムキになって反論した。

「お母さんが戻ってくるならどんなことでも信じる！」

「ふーん。・・・そうか」

龍樹は興味無さそうにそう返すと視線を自分の学生カバンへと移した。

そして、カバンから古びたコルトSAAと赤い弾頭のコルト弾を一つ取り出した。

SAAはそのまま右手に持ち、コルト弾はポケットへと仕舞われた。

「まあ、仕方ない。これで一気に決めるか」

シャン シャン シャン

七人ミサキは動きを止めた。

前方に獲物がいたからである。

「さてと。三沢、頼むぞ」

龍樹はSAAのハンマーを下ろした。

恵子は龍樹の持っていた懐中電灯で七人ミサキを照らした。
七人ミサキはこちらから見て横にほぼ一列に並んでいる。

まず恵子が照らした一番左端のミサキに一発。

弾はミサキの心臓部へと吸い込まれていく。

「アギヤアアアッ!!」

ミサキはこの世のものとは思えない叫び声を上げて砂とも塵とも似つかないようなものになり、消えた。

龍樹がまたハンマーを下ろす。
シリンダーが回る。

「次頼む!!」

恵子はさっき消えていったミサキのすぐ右隣りのミサキへと光を当ててる。

すると、ミサキ達は鈴の音を響かせながらこちらへと前進を始めた。

「カ……マ……ター」

元・高田が龍樹の名前を呼びながらゆっくりとした足取りで近づいてくる。

一匹一匹端から順に龍樹はミサキを撃ち殺していった。

しかし、S A Aの装弾数は6発、相手は7匹。

それが何を意味するか恵子は龍樹が6匹目のミサキを撃ち殺した時に気付いた。

「鎌田くん逃げて!!！」

「カマタアアア!!！」

龍樹が空薬莖を排出し、赤い弾頭のコルト弾を1発装填した時、最後のミサキである元・高田は龍樹に抱きつこうと両腕を伸ばしていた。

恵子は龍樹のそして自分の死を身近に感じた。

が、その感覚は杞憂であったことに後々気付く。

S A Aの発砲音より一際大きな発砲音と共に元・高田の体は宙を舞った。

まるで映画のワンシーンのようにそれでいて景色がスローモーションで動いているかのように恵子には感じられた。

元・高田は地に着いた後も2 m程転がって行った。

龍樹の左手にはM 8 7 0が握られている。
これで吹き飛ばしたのだろう。

「悪いな。言い忘れたが俺は両利きなんだ。………安心しろ
三沢、今までの6発はフェイクだ。7発目こそが魔弾だ」

恵子は魔弾の射手を知らないので意味が分からなかったが、自分の身の安全だけは保障された気がした。

「商品名ゼミエル……発射」

SAAの銃口から放たれた赤い弾頭のコルト弾は元・高田の心臓部へと吸い込まれていった。

しかし、弾は動きを止める事を知らない。

そのまま方向転換し、元・高田の体中を駆け巡った。

「ア……………カ……………カ……………マ」

元・高田は呂律が回らず訳の分からない声を上げて後ろに仰向けに倒れ込んだ。

「Fake sixは妖怪の核を的確に射抜くのに対し、ザミエルは妖怪の核の周囲で同心円状に運動を繰り返す。勢いそのままなむごいもんだ」

核というのは妖怪の心臓に当たる部位のことである。

Fake sixはその核が発する微弱な電波に反応して核を確実に射抜く。

それに対してザミエルはその微弱な電波に乗り、電波の動きと同じ

同心円状の運動を続ける。

だが、核は破壊されない限り電波を発することを止めない。

といっても、妖怪とて人間より生命力が強いといってもある程度の傷を負ったら死ぬ。

だが、コルト弾程度の大きさの弾丸の威力で殺せる程ではない。妖怪にとってはまさに生き地獄である。

しだいに元・高田の体中から真っ赤な液体が流れ始めた。これは妖怪の血に当たるものである。

妖怪であろうともその体のベースは生物と一緒になのだ。

それとほぼ同時にザミエルも動きを止めた（核の活動が止まった訳ではなく、ただ単に弾丸の勢いが死んだからである）。

龍樹はその光景をただただ眺めていた。

七人ミサキ(5) 究極の一択

龍樹の冷たい反応に対して恵子は地べたにへたり込み、体を小刻みに震わせていた。

「どうした？お前が待ち望んでいた妖怪の肉だ。安心しろ、かなり弱ってる。こいつはもうほとんど人間と変わらん」

その言葉に恵子は更に体を震わせた。

龍樹は構わず続ける。

「そもそも七人ミサキは七人だからこそ意味がある訳で、こいつ一匹ならおとなしいもんだ。さあ、早く肉を取れ。ナイフくらい持ってきてるだろ？」

恵子は怯えた表情で首を横に振り、否定の意を示した。

「い………嫌」

「何が嫌なんだ？これがお前の望んだ結末だろ？」

龍樹は声の調子、表情、恐らく心拍数ですら変えずに言い放った。

たまらず恵子の反論が始まった。

「だって、これは妖怪じゃなくて高田くんじゃない！」

「元な」

「でも、鎌田くんのことも私の事も」

「そりゃ妖怪になってまだ1時間も経ってないから記憶くらいあるだろ」

「大体、死体を切り刻むなんて死者への冒瀆だよ！！」

「じゃあ眠っている死者を無理やり生き返らせるのは死者への冒瀆じゃないのか？」

恵子は言葉に詰まった。

核心を突かれ唇を噛みしめている恵子に向かって龍樹は続けた。

「いいか。究極の二択なんて難しいものじゃねえんだよ、これは。ここで痛みに苦しみながら消えていく高田を看取るのもお前のお袋さんを生き返らせるのもどっちもさっき言った死者への冒瀆って奴だろ？ だったら高田は楽にさせてやり、それでいてお前のお袋さんは生き返る。それが一番いいだろ。これ以上とない究極の一択だと思うが？」

恵子はまるで雷に打たれたかのように驚愕し、思いつめた。

自分のしようとしていることがどれだけ愚かな事だったのかがようやく分かった。

もっとも龍樹はそれを悟らせる為にそんな事を言ったわけでは無さそうだが。

そして、恵子は涙を流しながら元・高田のすぐ傍に座りこんだ。

ナイフを固く握り直した恵子はもう一度、高田の苦痛に満ちた顔を見つめた。

「ミ・・・・・・・・サ・・・・・・・・ワー・・・・・・・・」

「うっ、うあ・・・・・・・・うあああああああ!!」

恵子は何度も妖怪に向かって刃を振り下ろした。

肉の抉られるあの独特の音は恵子の耳に一生残るだろう。

元・高田の体は小柄な一人の少女に200gにも満たない肉片を残して消えていった。

「で、結局お母さんはどうなったの？」

セーラー服に身を包んだ佳奈が龍樹に尋ねる。

「さあ。大体あいつ一昨日から学校に来てねえじゃねえか」
龍樹はそう返してこの話題には似つかない程の晴れ渡った青空を見つめた。

雲ひとつない快晴である。

「あっ」

佳奈が思わず感情的な声を上げた。

視線の先にあつたのは優しそうな母に見送られて登校する三沢恵子の姿だった。

恵子はこちらに気付くと逃げのように学校へと走り去って行った。恵子の母はこちらに気付くと軽く会釈をしてきた。龍樹、佳奈共に同じ要領で会釈を返す。

しばらくの沈黙の後、佳奈が重々しく口を開いた。

「成功したんだね」

「ああ」

「………ねえ、これで良かったの？」

「俺には今考えてもこれ以上の結果が考えつかねえ」

「恵子ちゃんは幸せなの？」

「………それはあいつが決めることだ。俺達には関係ない」

路地から出てきた黒猫が龍樹へ非難の声を浴びせるかのように「ニャー」と短く鳴いた。

七人ミサキ(5) 究極の一択 (後書き)

はい、これにて七人ミサキ編終わりです。

皆さまどうだったでしょうか？

この作品を書いてて思ったのが銃撃戦の表現が難しい！
変な部分があったらまた是非教えてください

幕間〜江本直哉の挨拶回り〜

龍樹は飯島高校校舎の3階を歩いているところだった。

理由はただ一つ、委員長命令だからである。(N?は学校では委員会として扱われている)

委員長の名は根来ねらいいずみ。

いつものほほんとした雰囲気を漂わせている眼鏡をかけた龍樹の1つ上の先輩である。

そして、龍樹はいずみの待つ第三会議室の前で立ち尽くしていた。

「あの人の命令だからな……何頼まれるか」

龍樹は意を決して横開きの扉を開け、中へと入った。

「失礼します」
「いらつしゃい」

間延びした声が教室中に響いた。

龍樹の目の前にはニコニコと微笑んでいるいずみとそのその脇に見た事の無い茶髪の少年が座っていた。

「久しぶりねえ。龍樹くん」

「お久しぶりです」

「メールも返してくれないから心配したのよ」

「七人ミサキが出たっていうメールに返信をしると？」

「うん。私としては。まあ、そんなことよりこの子に学校案内してあげて」

そう言っただけいずみは茶髪の少年の頭を軽く2回撫でた。

気恥ずかしさからくるのか少年は頬を赤らめて下を向いた。

「そいつは？」

「ここに転校してきた1年生の江本直哉くん」

直哉は立ち上がり、良く通る声で龍樹に自己紹介を始めた。

「江本といます。よろしく願います」

直哉の堅苦しい挨拶を見て龍樹は顔をしかめた。

「江本くんは両親を不慮の事故で亡くして此処に来たの。で、中学の頃クレー射撃が得意だったそうだから戦闘要員に入れようかと思つて」

「いや、それはいいんですけど俺より暇な奴は？」

「私は雑務があるし、翔良くんも佳奈ちゃんも連絡つかないし、零治くんは私が苦手だから・・・あと剛太くんは例によつていないし」

「今個人的な理由ありませんでした？」

「とにかく龍樹くんよろしくね」

いずみは直哉を無理やり押し付け、笑顔を浮かべながら自分は会議室から出て行ってしまった。

龍樹はため息をつき、直哉を見据えた。

直哉は反射的に龍樹に頭を下げた。

「宜しく願います」

「ああ。・・・で、どこまで聞いている？」

「N？が孤児の集まる場所ってところまでは」

第三次世界大戦の後、日本中の養護施設は姿を消した。それこそがN?の始まりだった。

天涯孤独となつた孤児達は国の命令でN?に入る。

N?の仕事は小学生の頃から与えられる。

と言つても小学校での仕事は妖怪のデータを頭に入れたりするだけで戦闘訓練は行わない。

中学校に進学すると部活代わりに弱い妖怪との実戦である。

その後高校に進学しない者はそのまま一生国の兵隊となり、進学する者は高校でも妖怪退治である。

彼らは本来なら放つておいても死んでいたいわば社会的死者であるため、死んでも誰にも損害は無いし誰も傷つかない。

少年兵の前例もある為、周囲からの反感も少ない。

危険な仕事には適任な訳である。

偶然身寄りが無くなった。

偶然親に捨てられた。

偶然不幸な星の下に生まれた。

たったそれだけで人は国の人形になってしまう。

「それだけ聞いてりゃ充分だ。さて、まずは副委員長に挨拶に行くぞ」

龍樹は直哉を待たずに一人で会議室を出た。
慌てて直哉もその後を追った。

「こんな所で何するつもりなんですか？」
先ほどから直哉の問いはことごとく無視されている。

龍樹はずっと床のタイルを丁寧一枚一枚蹴っている。

今2人がいるのは数学教材室。
その名の通り、数学の教材が所せましと置かれている。
ふと龍樹が一枚のタイルを蹴って何かに気付いたかのような顔を作った。

「どうしたんですか？」

「少し待ってください」

そう言っつて、龍樹は床のタイルに手を掛けた。
そして、その手を思いつきり引いた。
ベリベリという音と共にタイルは剥がれた。

「ちよっ！！何を」

タイルの下に広がっているのはコンクリートの床。のはずだった。

タイルの下には穴が出来ており、しかも穴から僅かだが明かりが漏れている。

龍樹は躊躇わずに床下へと下りて行った。

「おい、邪魔するぞ。直哉も下りてこい」

「えっ………はい」

直哉も龍樹に続いて床下へと飛び降りた。

しかし、直哉は地面までの距離が意外と深い事を知らず尻もちをついた。

「痛っ………」

直哉が床下で目にした光景は信じられないものだった。

黒のソファに天井からぶら下がる蛍光灯。
TVまであった。

そして、黒のソファには背の高い色白の少年が座っていた。

少年は座ったまま陽気な声で言った。

「ようこそ今井銃器店へ！………つて、一見さんか」
「ああ、新入りだ」

「へえ、そうかそうか。俺は2-Aの今井翔良^{いまいしゅうりょう}。N?の副委員長であり今井銃器店の店長でもある。よろしく!!」

翔良はそう言い終わると直哉にそつと何かを手渡した。

「何ですかこれ………クーポン？」

「イエス！そいつがあれば一部のハンドガンが半額。弾とセットで買う時はスペアマガジンが付いてくるという優れもの！お友達にも2、3枚渡してやって！でも教師は勘弁で」

一息でそう言い終わると翔良はカカカと豪快に笑い始めた。
そして、そのまま続けた。

「で、何の用？」

「一つはこの新入りの挨拶回り。もう一つは俺の依頼だ」

「どうせFake Sixだろ？」

「ザミエルもな」

「あれを使ったか。どうだった？」

「最高だったぜ」

「そうか。………まあ、一週間以内には作っとくわ。金は作り終えてからで」

「頼んだぞ。さて、次に行くぞ直哉」

そう言つて龍樹はさっき入った穴から下がっているロープを伝つて上へと登り始めた。

「……あれ？その存在言つてくれてもよかつたんじゃないですか？」

直哉は誰か（・・）にそう言つて自分も龍樹の後に続いた。

――飯島高校3階・廊下――

「何だ男か」

ながいれいじ
長井零治が龍樹と直哉を見て発した一言こそそれだった。

金髪、青い瞳、高い鼻。一瞬、外国人と見間違える程の整った顔立ちである。

しかし、その性格は俗に言う不細工と呼ばれるものであった。

男性に対しては厳しく女性には優しく。

彼のそのポリシーが行き過ぎた物であることは言わずとも分かるだろう。

「悪いが男と話す事は無い。帰れ」

「俺が女装して来たらどうすんだよ？」

「するのか？」

龍樹は言葉を返せなかった。

その様子を不安げに見ていた直哉は自分から自己紹介を始めた。

「1年の江本直哉と言います。よろしくお」

「興味なし。顔はもう覚えたから結構だ」

そう言って零治は龍樹と直哉の前を足早に通り過ぎて行った。

直哉はただそれを見送ることしか出来なかった。

しばらくして何とか直哉は口を開いた。

「変わった人ですね……」

「まあな。ああいう奴なんだ。気にするな。腕は確かなんだがな・・・」

龍樹はそう言い終わると忌々しげに頭を掻きまわった。

「あとは・・・」

「佳奈って人か剛太って人ですね」

「いや、どちらも止めた方がいいな」

「何で!?!」

直哉は驚愕の表情を浮かべたまま龍樹に目を向けた。

「まず、剛太先輩はどこにいるか分からん。佳奈は・・・」

日は（・・・）止めた方がいい」

「何ですか？今日はって」

直哉は明らかに今までとは違う龍樹の様子に少し不安を覚えたが、こつこつのはしっかりやった方が良くと言うもう一人の自分の心の声に後押しされて尚も食い下がった。

「あつ、龍樹だ!」

その声と共に龍樹は恐怖から肩を震わせた。

ゆっくりと振り返った龍樹が目にしたのは津田佳奈の姿だった。

直哉はその姿にしばらく見惚れていた。

佳奈はいずみとはまた違った魅力が溢れているように直哉には思えた。

「今日、金曜だったよね」

「そ、そうだな」

龍樹はぎこちなく返事をした。

直哉はそこに割って入って自己紹介を始めた。

「新しくN?に入った江本直哉と言います！宜しくお願ひします！
！」

心なしか翔良や零治の時より直哉の声は元気がある。

「新入りか」。よろしくね、直哉くん」

「はい！！」

龍樹は直哉が佳奈に抱いている感情を瞬時に察知し、直哉を佳奈から少し離れた所に引っ張って行った。そして、直哉に小声で忠告をした。

「やめろ、本当にあいつだけはやめろ」

直哉も小声で反論する。

「何ですか！後輩の純真な恋をじゃまするんですか？」

「純真どうここの問題じゃねえ。てか、お前そんなキャラなのか！？」

「はい！！」

「いいか、あいつは」

「何の話してんの？」

佳奈が龍樹の肩に手を置いた。

その所為で龍樹は続く言葉が発せなかった。

おそらく佳奈は龍樹の続く言葉を止める為にそのようなことをした訳ではないだろう。

天然。

龍樹はその言葉が最も似合う裏・風紀委員は佳奈だと思っている。

「いや……大した話じゃない」

「そっか。で、今日は何おごってくれんの？」

佳奈は目を輝かせてそう言う。

龍樹はその視線から逃れる様に目を泳がせながら返す。

「きよ、今日か。ヘルシーにラーメンとかどうだ？」

「全然ヘルシーじゃないしもっと良い物食べたい」

「えー……じゃあ」

直哉は渋る龍樹を見てある考えが浮かんだ。

直哉はその考えをそのまま言葉にした。

「俺が奢りますよ」

「えっ、いいの？」

佳奈の目の輝きは一瞬で直哉に向けられた。

直哉はそこからさらに攻めの姿勢を見せた。

「いいですよ。親交の証です！というより」

続く言葉を龍樹が遮った。

「やめろ、お前はこいつの秘密を知らないんだ！」

「止めないでください龍樹先輩！」

佳奈先輩行きましようー！」

龍樹はそれ以上止める事をやめた。

その顔には諦めの色が浮かんでいた。

「いいけど佳奈結構食べるよ？」

「大丈夫です任せてくださいー！」

直哉は自信たっぷりの声でそう言って佳奈の手を取り、走り出した。龍樹は彼らを止めなかった罪悪感に苛まれたが後の祭りだった。

金曜日。佳奈にとっては吉日。龍樹にとっては厄日。

ちなみに飯島高校近くの高級焼き肉店で約12万円分の肉を食べたカップルがいたという伝説は今もなお語り継がれている。

同時期にN?の寮の空き部屋から泣き声が聞こえるという怪談も裏・風紀委員の間で語り継がれていた。その空き部屋こそ江本直哉の自室であった。

かまいたち(1)〜一陣の風(前書き)

かまいたち編スタート

かまいたち(1)〜一陣の風〜

某月某日 PM9:00

男の店の営業時間は午後9時まで。男は店先に掛けてある札をOPENからCLOSEに裏返した。これで男の本日の仕事は終わりである。

「はあ、今日も疲れたなあ。年には勝てん」

まるで中年のような台詞を呟いているが男はまだ三十路を迎えてすらいない。

まだまだ男が経営するこの人形店『三月堂』の青の制服姿を見ても不自然には感じられない。といつても三月堂の店員は店長兼店員のこの男とその妻だけなのだが。

ふと、とてつもない強風が吹いた。店の看板が音を立てて落下する。

「うわ………凄い風だな」

そう呟きながら男は落ちた看板を一旦別の場所に置いておこうと考えた。

明日にでももう一度直しておけばいいだろうという考えだった。

「ったく………ん？」

男は違和感を覚えた。

看板を持ちあげるには当然両腕を使う。

だが、右腕の感覚が妙である。

男は右肩から右手に掛けて左の人差し指をゆっくりと滑らせる。

違和感の正体は肘から下の部位の消失だった。

「あ」

また強風が吹いた。

男の首は宙を舞い、堅いコンクリートの上に落下した。

彼が最後に呼ぼうとしたのは店の名か妻の名かはたまた娘の名か。

今となつては誰にもわからない。

龍樹は自らの愛銃であるグロック17を入念に手入れしていた。その表情はまさに喜色満面であり、鼻歌でも口ずさみ始めそうである。

「相変わらず古いの好きだね。リユーちゃんは」

ニヤニヤしながら龍樹の手元を覗き込むのはやはり耕治だった。龍樹の表情が一瞬で曇る。

「何の用だ？」

「っと、ごめんごめん。忘れてないって銃の手入れ中は話しかけるなってのは。でも、あちらの方が用があるみたいでさ」

龍樹が耕治の指さす方に目を向けると横開きのドアに翔良がもたれかかっていた。

翔良は龍樹の視線に気づくと手招きした。

「今井もN？なのか？ガンアクション出来るようには見えねえけど」

「まあ、翔良は基本武器の発明が仕事だからな」

龍樹はそう返して翔良の元へと歩き始めた。

だが耕治は龍樹の後にピツタリと着いてくる。

「着いてくるな」

「ふふふ。何で着いてくるか知りたいか？」

「いや、遠慮しとく」

「それはな」

「聞いちゃいねえ」

耕治はポケットから一枚のA4サイズの折りたたまれた紙を取り出し、龍樹の前でそれを広げた。

「何だこれ？………って、これN？の認証状じゃねえか！」

人目を気にして龍樹は小さい声で突っ込んだ。
それに反応した翔良も教室に入ってきた。

翔良はその紙を見て呟いた。

「ああ、補充要員か」

「その通りだよ。今井君」

怪人〇十面相を思わせる口ぶりで耕治はそう言う。

だが龍樹は補充要員が良く分かってないらしい。

耕治は龍樹の気持ちを察し、鼻高々に説明を始めた。

「おや、分かってないようだねリユーちゃんは。補充要員はその名の通りN?の補欠と銘打っているがその実態は主に情報収集を担当し、いわば戦闘面のサポートを行うのだよ。わかったかね、リユーちゃん」

「分かったがその喋り方は何だ？」

「昨日江〇川乱歩を何冊か。ハマっちゃって徹夜した」

「勉強しろよ」

「ついでに言えば補充要員は一般生徒でも親の承諾すらあれば入れるのだよ、龍樹君」

翔良も同じ口調で補足した。

2人の〇十面相は見つめ合い、ふふふっと笑い合った。

――放課後・飯島高校生徒玄関――

「で、結局用件は何だったんだ？」

龍樹が下駄箱の靴と上履きを履き替えながら翔良に尋ねる。

「えーと、好きな推理作家は誰かって話か？」

「それはお前と耕治の馬鹿話の内容だろ」

二人は靴に履き替え、校門を出て帰路に着く。

「ああ、分かってるさ。何、まだ確証は無いんだが昨日の夜男が1

人殺されてな」

龍樹は適当に相槌を打ち、空を見上げた。
日が傾き始めている。

後ろからはサツカー部や陸上部の元気な掛け声が聞こえてくる。

「で、その死体が妙なんだ。首と右腕がすっぱり切られててな」

翔良が左手で自分の首と右腕を切るような動作を見せる。

「ただの猟奇殺人じゃねえのか？」

「この世の中で妖怪と猟奇殺人鬼どっちが多いよ」

龍樹はふつと笑い、沈黙した。

しばらく歩いてから龍樹はまた尋ねた。

「正体は分かっているのか？」

「さあ。だから新しい補充要員採用したんだろ」

翔良はいつの間に取りだした何かの設計図と睨めっこしながらそんなことどうでもいいといった口調で返す。

「今度は何作ってるんだ？」

「コーナージュット。大昔に滅んだらしいが是非復活させたい」

「そんな物需要あるのか？」

「多分無いかな」

ふと強い風がこちらに向かって吹いて2人は動きを止めた。

一瞬、龍樹は顔をしかめて足を止めるもまた構わず歩き始めた。

「……………何も起きなきゃいいが」

龍樹は誰に言う訳でもなく不安げにそう呟いた。

その日の深夜、パチンコ『ラッキー7』飯島店で左足を切断された
男性会社員の遺体が発見された。

かまいたち(2) 男が困って邪道

「昨夜また犠牲者が出たわ。今度は左足が持つてかれたらしいわ」
いつもと変わらない口調でいずみは簡潔な説明を終わらせた。

現在、N?は剛太と翔良を除く全員が寮内のいずみの部屋に集められている。

部屋の内装は壁に立てかけてある日本刀さえなければごく一般的な若い女の部屋である。

直哉が日本刀に目を向けながらも質問した。

「やっぱりかまいたちですかね？」

「その可能性が高いけどまだ実態が掴めてないから何ともね」

そう言っただけいずみは肩を竦める。

しかし、人が2人死んだのは自分たちのせいだという自覚が無いのかその感情を押し殺しているのか、いずみはいつも通りニコニコ笑っているだけである。

もっともそれはいずみだけでなく直哉以外の委員もこのような事態に馴れているのか各々好きな事をしながら適当に話を聞いている。

グロツクの手入れをしながら龍樹が尋ねた。

「で、いつ動くんですか？」

「本当はすぐにも動きたいんだけどさっき言ったように向こうの

正体が分からないから危険だし、かといって次の犠牲者を出すわけにはいかないから。そこで」

いずみが眼鏡の位置を直してから続けた。

「困を使いましょ」

何故かいずみの声は少し楽しげである。

その時、龍樹の背中に悪寒が走った。

笑みを浮かべながら震える声で龍樹は尋ねた。

「誰が？」

「勿論龍樹くん」

今のいずみは小悪魔どころか悪魔の微笑みを浮かべている。

どうすればあんな人に恐怖を与える微笑みが作れるのか直哉は疑問に思った。

「……………一応理由を聞かせてもらえますかね」

「まず今回の件の被害者は両方男性。だから私と佳奈ちゃんは除外で、直哉くんは勿論翔良くんもほとんど妖怪の実戦経験が無く危険なのでこれも除外。零治くんは相手がかまいたたちの時に武器が武器だけに迅速な対応が出来ないから除外。となると、グロックにピースメーカーにM870が標準装備の龍樹くんが一番適していると思うんだけど？」

「かまいたちだったら男女関係なく殺すと思いますかね」

直哉は龍樹の意見はもつともだと思ったが勿論肯定できるわけがない。

「と、言う訳だから」

いずみは佳奈が読書をする為にもたれかかっていた真新しい段ボール箱から背広を1着取り出した。

「これ着て」

「何でちよつと甘えた口調なんですか……」

「色気を出した方が良いと思って」

「むしろ色仕掛けしてどうするんですか」

と、反論しつつもいずみの左手が日本刀に伸びているのを見て龍樹は素早くいずみから背広を奪い取り、制服の上を脱ぎ、背広に着替えた。

それを見ていずみが感嘆の声を上げる。

「きゃあ、かわいい」

「楽しんでますよね？」

「7：3つてところかしら？」

「遊びの比率が7で仕事の比率が3つてことですか？」

「いや、髪型も7：3にすればいいのにつて」

「仕事行つてきます」

このままだと本当に髪型まで弄られかねない。

龍樹はそう判断して、素早く仕事の準備を終えた。

佳奈も読みかけの本にしおりを挿み、龍樹の後ろを着いて部屋から

出て行った。

いずみが直哉に声をかけた。

「直哉くんも着いていつてあげて〜」

「えっ？俺ですか？でも、いまいち何すればいいか……」

「良いの良いの。見てるだけでも勉強になるから」

その言葉に押されて直哉も既に出て行った龍樹と佳奈を追う事にした。

だが、直哉は内心ほっとしていた。

部屋に集まってから一言も喋らなかつた零治といずみという先輩2人と一緒にあそこに残されるのは正直気まづかつた。

一度、直哉は自室に戻り今井銃器店で購入したライフル、モーゼルKar98kを背負って先に行った2人を追いかけた。

（それに佳奈先輩とも一緒に仕事ができるし万々歳だ！！）

直哉はまだ彼女のことを諦めていなかった。

先ほどまで黙ってお茶を飲んでいた零治が直哉が出て行くとうやうや口を開いた。

「いずみさん、2人つきりになったところで一緒に夕食でもいかがですか？夜景のきれいなビルの最上階のフレンチレスト」

「あっ、卵切らしてたの忘れてた。今は・・・7時30分。零治くん、ちよつと買い物行ってくるから留守番頼んでいい？」

いずみは零治の返事も聞かずに財布を持って出て行った。

零治の精一杯の甘い誘いも虚しく彼はただ1人取り残された。

「ははは・・・」

乾いた笑い声だけが部屋中に響いた。

かまいたち(3) その疾きこと風の如く

龍樹は夜の飯島市の繁華街を歩いていった。

付近で2件も殺人事件が起きたせいかもしれないもは賑わっているはずのここもひっそりとしている。

店も7時にはほとんどの店が営業を終了した。

龍樹はこの珍しい光景に目を移しながらもピンマイクへと話しかけた。

「全く妖怪が出る様子が無いんだが」

佳奈のやるせない声が返ってきた。

「そう言われても今日中に仕留めないとまた被害者が出るよ？いいから黙って歩きなさい」

「はあ……」

龍樹の足取りは更に重くなった。

龍樹から少し離れた路地にて

「佳奈先輩、もしかましたが出たらどうするんですか？」

「まだかましたとは決まってるけど。いつもは龍樹がFake Six使って終わりだけど今回はそれが無いから佳奈が燃やして殺すと思う」

直哉は佳奈の口から出た言葉の意味を尋ねた。

「燃やす？」

佳奈が答えようとしたその瞬間。

彼女のすぐ後ろを明らかに違う雰囲気風が通った。

佳奈は勿論、その風を浴びてすらいない直哉でも気付く程その風は異常だった。

「今ですよね？」

「うん」

佳奈と直哉はすぐに路地から飛び出して龍樹の元へと走り出した。

龍樹はその身を切りつけられるまで異変に気付かなかった。

背中に走る燃えるような衝撃が彼を襲った。

「うっ！？」

すぐにホルスターからグロックを抜き、構える。

風は狭い道を存分に使い、前後左右上下を飛び回る。

牽制の意味も込めて龍樹は3発程撃つたが当然かわされた。

風がまた龍樹を襲う。

何とか直撃は避けたものの、今度は右肩に深い切り傷が出来た。

「狙うなら後ろの2人にしろよ、畜生」

風は大きく空に上昇し、急降下してきた。

それを見越して龍樹はカバンに入ってるM870を取り出し、風に向かって発砲。

しかし、多方向へと弾を撒き散らす散弾ですら風に傷をつけることは出来なかったが龍樹の計算通りに事は進んでいた。

「この狭い道で散弾かわすとなるとやっぱり上か下だよな」

下降することでかわした風に2発の9ミリ・パラベラム弾が襲った。

弾は風の中心部へと吸い込まれていった。

獣の悲鳴のような叫びを上げると風は逃げて行った。

それからすぐに風が逃げて行ったのと逆方向から少しばかり遅い援軍が来た。

「どうしたの？」

「大丈夫ですか？」

佳奈と直哉は同時に尋ねた。

「やられた。あいつ予想以上に速いぞ。くそっ」

龍樹は傷口に学生カバンから出した消毒液をまず右肩にかけ、強引に背中にも垂らす。

痛みに声を上げそうになったが我慢した。

包帯を巻きながら2人に指示を出した。

「あとから必ず追いつくから先に行っててくれ」

「分かったけど妖怪は何処に行ったの？」

「血の跡を辿れ。最低でも2発撃ち込んだから出血してるはずだ。

細胞組織が回復してその内追跡できなくなる。早く！」

「分かりました」

「分かった」

佳奈と直哉は道路に点々と続いている真っ赤な血を目印に走り始めた。

血が続いていた場所は森だった。

草木がうつそうと生い茂るその森はまるで来る者を拒むかのように木々を揺らして威嚇してるように見える。

直哉は正直少し逃げ腰である。

「この中みたいね。直哉くん、明かりある？」

直哉はポケットからペンライトを取り出した。

佳奈は少し不満げな顔をしたが無いよりはマシだと思い、直哉の手からペンライトを受け取った。

「直哉くん、もしも危なくなったらすぐ逃げて。ちょっと危険っぽいから」

「分かりました」

普段だったら絶対女子を先頭に歩かせることなどしない直哉だったが、今回ばかりはそれも躊躇われ、先頭を佳奈に譲った。

だが、直哉はいくらなんでもそんな簡単に妖怪とは遭遇しないだろ

うと高をくくっていた。

その幻想は森に入つて3分もしない内にいとも簡単に崩された。

先に気付いたのは直哉だった。

一か所。本当に小さくその空間にだけ小さな竜巻が出来ていた。

竜巻は木の葉を纏いながらゆっくりとこちらに近づいてくる。

「佳奈先輩!!」

佳奈がこちらを向くよりも早く直哉は近くの茂みへと飛び込んだ。

佳奈もすぐに先の呼びかけの意味を理解し、右に前転することで竜巻をかわした。

竜巻の中にはいたちがいた。

両手が鎌の様な鋭い刃物になっているという点を除けばそれは正しくいたちだろう。

その姿はやはりかまいたちだ。

かまいたちの体当たりで直哉のペンライトは壊され、光源が森から消えた。

「まったく、もう！」

佳奈の右腕を伝って辺りの草木が燃えだした。それによって再び辺りは明るくなる。

「熱っ！！！」

だが、直哉はその燃えている草木の生い茂る茂みへと隠れていたのだからたまったものではない。

佳奈の右腕から炎が出たのが気になったが直哉は身の安全を第一に考え、その場を離れた。

かまいたちは佳奈に狙いを定めたらしく直哉を追ってこない。

「11のー！」

佳奈の右腕から炎が噴射される。

今度の炎は明かりとりの為ではなく、かまいたちへの火炎放射である。

かまいたちは火炎放射をかわして佳奈に体当たりを仕掛ける。

竜巻の中でかまいたちが両手を前に突き出して構えていることから触れたら指の1本や2本は持ってかれるだろう。

佳奈も危険を察知し、体当たりをかわしてすぐに火炎放射による反撃に移る。

そして、かまいたちはそれをかわす。

その応酬を何度か見て直哉の頭に一つの疑問が浮かんだ。

「何で佳奈先輩あんなトロい（・・・）やつを仕留められないんだ？」

かまいたち（4）（ザ・シューター）

江本直哉の動体視力ははっきり言って異常だった。

彼は物心ついた頃には父のクレー射撃を見ていた。

いや、魅せられていた。

彼の父は息子を射撃のオリンピック選手に育てあげたかったらしい。直哉はこうやって成長していき小学校に入学する頃には1日8回は競技用のショットガン、M37を握っていた。

そして、中学校に入り当然彼はクレー射撃部に入部した。

そこで彼の驚異的な動体視力が目覚めた。

クレーの飛ぶ速度が異常に遅く見える。

それどころか他の物体の動きも。

普段はどうってことないのだが集中時には30分の1倍速で世界が廻っているように見えた。

しかし、直哉のクレー射撃の腕前は悪くは無かったが探せばもっと

凄い記録の持ち主はいるだろうというくらいのスコアだった。

その理由として挙げられるのが精神力。

1秒が30秒。10秒が300秒。60秒が1800秒。

その時間の流れの遅さを嫌って直哉は出来る限り集中せずに競技に臨んだ。

やがてクレール射撃も高校では二度としないと誓っていた。

直哉は少しずつ不安になってきた。

スピードの違いで佳奈が少しずつ押され始めているからである。事実、かまいたちはまだ火傷1つ負っていないのに対して佳奈の制服は所々破れ、そこから血が流れている。

「くっ、龍樹はまだ？」

佳奈は1人自問してかまいたちに向かって火炎放射を行う。

だが、やはりヒラリと身をかわされてしまう。

そして、かまいたちの体当たり。

その応酬は何度続いただろうか。

少なくとももう直哉は20回は見た。

そして、また佳奈の右腕から火炎放射……

が、どれだけ待っても佳奈の右腕から炎は出なかった。

その隙を逃さずかまいたちは佳奈の右腕を狙って前足を振り下ろしにかかる。

「佳奈先輩！！」

その時の直哉はかまいたちのみに集中していた。

愛する人と自らの精神。

全ての人がそう答えるかは分からないが少なくとも直哉は後者を犠牲にした。

直哉は足下のモーゼルを手に取り、高倍率スコープを覗き込んだ。

目標までの距離は50mも無い。

本来なら高倍率スコープを覗かずとも当てられる。

かまいたちの振り下ろしはひどくゆっくりしたものに見えた。

だが、佳奈の右腕はもう間に合わないだろう。

独特の発砲音と夜の森を照らす程のマズルフラッシュ。

そして、かまいたちの悲痛な金切り声。

苦しむかまいたちの傍に佳奈の右腕が落ちているのを見て直哉は自責の念に駆られた。

モーゼルのボルトを引き、空薬莖を排出する。

腹に穴のあいたかまいたちに続けて今度は頭に風穴を開ける。が、声を上げて苦しんではいるものの、死んではいない。

今度こそ殺してやる。

そう思い、またボルトを引こうとした時だった。

「佳奈、逃げる!!」

龍樹の声が森中に響いた。

佳奈は切断された右腕をそのままにして急いでその場から距離を取った。

龍樹は翔良手製の手榴弾をかまいたちに向かって投げた。

途端にかまいたちの周囲は爆音に包まれた。

燃えながら光と炎を放ち続ける森をバックに3人は帰路についた。

「一体、何だったんですか？」

直哉は龍樹に訳が分からないといった風に尋ねた。

「何の事だ？」

「佳奈先輩の右腕ですよ。出血すらない」

「ああ……」

だが、龍樹の口から答えは出なかった。

龍樹の言つべきか言わざるべきか悩んでいる顔を見ると直哉は追求できなかった。

「にしても良く寝てますね」

直哉は佳奈を背負い直し、呟いた。

あの爆発の後、佳奈は気絶したのかぐつすりと眠っていた。

爆発から身は守れたらしく火傷の跡が無かったのが幸이었다。

ちなみにかまいたちの方は文字通り跡形も無く消えていた。

直哉は佳奈の無い右腕の切断面をまじまじと見つめる。

そこからは一滴の血も噴き出していない。実に不思議な光景だった。

「寝込みを狙ってるのか？最低だな、後輩」

「いや、ちよつ、違いますよ！」

そう弁解した直哉だったがその気持ちが無かったと言えは嘘になる。

かまいたち(5)くピアノは弾けないく

佳奈は夢を見ていた。

「佳奈はピアノが上手ね」
「将来はピアニストかもな。ハハハ」

(嫌だ・・・嫌だ)

「大丈夫ですか!?!?!?!?!生存1!子供が1人!?!」
「残念ですがもう右腕は・・・・・・・・」

「兄さんの娘?しかも右腕が無い?そんな子家で養えませんよ」
「・・・市で起きた津田夫婦惨殺事件は娘の津田佳奈ちゃん(9)の証言によると妖怪の仕業であるとされており・・・・・・・・」

(嫌だ嫌だ嫌だ)

「初めまして。私は委員長の根来いずみ。これからよろしくね」
「今井翔良だ。突然だがもう一度ピアノを弾きたくないか?」
「お前にピアノの道はもうない。翔良に上手く騙されたんだよ」

(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ)

「お前の右腕は妖怪を殺すためだけ（・・・）のものだ」

「いやああああああ！！！」

叫びながら佳奈は上体を起こした。

夢から覚めた今でも体に恐怖の色は刻まれており、現に心臓の鼓動はまだ早い。

「おっ、起きた起きた」

その声で佳奈はここが翔良の住む地下帝国のベッドの上であるとい

うことを悟った。

ちなみに翔良は寮にも自室があるのだがこっちの方が快適だからという理由でいつも自分の地下帝国で寝泊まりしている。

地下帝国。

その名の通り翔良は学校には無断で地下に自分だけの空間を作り上げた。

ここに広がっている通路を通ることで学校からエスケープすることも可能だ。

翔良の地下帝国への入り口は校内だけで44か所、校外にも7か所作られている。

しかし、これは翔良が把握しているだけの数でありいずみや龍樹からは校外どころか県外にもあるのではないかと疑われている。

「ほらココア飲め」

翔良は佳奈にココアを差し出したが、カップは佳奈の左手に阻まれて壁に激突して割れた。

ココアがカーペットに染みて行く。

「……………たたく、俺も嫌われたもんだ」

「佳奈はまだあなたのことを許してない」

「まあそりゃそうだろう。つまるところお前も含め飯島高校の裏・風紀は皆俺の実験動物モルモットだからな。……………じゃあ聞くが替えの腕は要らないのか？」

佳奈は黙って首を横に振った。

「そうだろ？じゃあこの『火車ー？プロトタイプ』の使い心地を試してくれ」

翔良は台車に掛けられていた布を取った。

台車にはどこからどう見ても人間の腕にしか見えない物が乗せられていた。

「麻醉打つからじっとしてろよ。それと起きたらカップ片付けてくれ」

「嫌だ」

翔良はその答えに不満一つ漏らさず黙って佳奈の左腕に注射針を突き刺した。

佳奈は目の前で笑う少年に憎悪の炎を燃やしながらもゆっくりと眠りについていった。

少女はなくなつた腕を求めて必死に助けを請うた。
そして見つけた1つの方法。

義手

彼女は騙されているとも知らずにその案を承諾した。
彼女はこれでまたピアノが弾ける。そう思った。
だが、その義手は妖怪を焼き殺す為だけの物だった。

それがN？津田佳奈の誕生だった。

義手の中に簡易火炎放射機を無理やり埋め込んだ単純だが恐ろしい兵器。

それが今井翔良の発明品の中でもトップクラスの出来を誇る火車である。

「つまり、ただのガソリン切れだったってことですか？」

佳奈は頷く。

佳奈の右腕の話聞き終えた直哉の問いは実に単純なものだった。

佳奈は今日の学校は一応休み、部屋で寝ていた。

直哉は学校が終わるとすぐに佳奈に昨日の一件を聞きに来たのである。

「うん……でも何とも思わないの？直哉くんは」

「何がですか？」

「右腕が……義手ってことに」

「そんなの気にする訳無いじゃないですか。それより今夜どうですか？妖怪倒したから国からボーナスも出ましたし」

直哉はそう言って厚みのある茶封筒を佳奈に見せた。

その表情に嘘偽りは無い。

佳奈は自分の事を否定しない後輩に対して好意を抱いた。

恋愛感情とはまた別物だが。

と、同時に自分の新しい右腕に目をやった。

「これからもよろしくね。火車」

直哉に聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で佳奈はそう呟いた。

吸血鬼(1) ～ベタな転校生～ (前書き)

今章はかなり長くなると思われます

吸血鬼(1)くべたな転校生

「ふあーあ……………」

鎌田龍樹は思わず周りが目を向けるほどの大きな欠伸をした。

昨夜は遅くまで起きていた所為か、眠気がひどい。

理由は深夜に放送する映画を見ていたからという単純なものである。

「鎌田くん、先生のありがたいお話の途中で欠伸をするとは失礼にも程があるよ」

そう抗議するのは龍樹の目の前の席に座っているクラス委員である
まえのりょうたく
前野良沢。

眼鏡を掛け、綺麗に揃えられた7：3分け姿はやはり生真面目な印象を受ける。

それに加えて誇らしげに胸につけてあるクラス委員のバッジが憎い。

「あー、はいはい。俺が悪うございました。申し訳ございません」

龍樹の適当な態度に腹を立てたのか良沢は更に強い口調で返す。

「君が僕に謝られても困る。先生に謝りたまえ」

「……………俺にとってはどうでもいいが、今お前の味方一人もいないぞ」

良沢が後ろを振り返ると、クラスの男子が全員良沢を冷たく見つめ

ている。

女子は女子で鬱陶しそうな表情である。

普段ならクラスでも浮いている龍樹の味方をするのはとても珍しい事であり、原因は良沢が龍樹に抗議する直前の担任の一言の所為である。

「転校生を紹介します」

その言葉で2・C生徒は男女問わず期待で胸が高鳴った。

その大事なタイミングで誰が好き好んでクラス委員の説教など聞きたがるだろうか？

勿論そんな物好きは一人もいなかった。

「な……いや、まあ今はいいでしょう」

良沢は周囲の視線に耐えきれずに席に着いた。

そこで担任の教師は気を取り直して廊下に立っているであろう転校生に声をかけた。

ガラリと戸が開く音がする。

教室内に入ってきたのは男子の期待に添えた女子であった。

背は高く、黒髪で髪型はポニーテール。

人懐っこそうな顔つきをしている。

少女は元気な声で自己紹介を始めた。

「鬼頭流華きとうるかといます。みんなよろしく！」

一瞬で男子全員の気を引き、女子全員にマークされるのはまさに神業であった。

「じゃあ鬼頭さんは鎌田くん……あの一番後ろの子の隣に座ってください」

いつもは生徒を黙らすために拳銃の引き金を引く程の恐ろしい男性教師でもやはり転校生には優しい。

男子からの妬みの視線が龍樹に殺到する。

が、龍樹はそんな視線などどこ吹く風で受け流している。

美しい動きで流華は龍樹の隣の席まで歩き、座り、そして彼に話しかける。

「よろしくね、鎌田くん」

対する龍樹は不愛想に返事を返した。

「ああ、ヨロシク」

流華の人気は朝のホームルームから、現在昼食の時間までの短時間で絶対普遍のものとなっていた。

流華のルックス、声、性格全てにおいて高得点であるのだから当然だろう。

最初は煙たがっていた女子ですら何人かは彼女の周りに集まっている。

そこから少し離れた場所で龍樹と耕治は購買で売っていた幕の内弁当をひっそりと食べていた。

「で、今度は何があったんだよ？」

龍樹が白米を箸で口に運びながら尋ねる。

「おいおい、まだ何かあったと決まったわけじゃないだろ？」

「お前が昼食と一緒に食べようって言う時は大抵厄介事を持つてくる時だろうが」

「うーん。確かに」

そこで耕治は一度、紅じゃけを咀嚼してから続けた。

「千尾川ちおがわの河原でミイラ状態の女性の死体が発見された。体中に無数の刺し傷があったらしい」
千尾川とは飯島高校から北に3・4km行ったところを流れる川の事である。

「…………お前、どつからそんな情報仕入れてきてんだ？」

「企業秘密。言っとくが、かまいたちの時も情報源は俺だぞ」

「まあ、あのゆったりとした委員長がそんな事するイメージは無いしな」

今頃、いずみは盛大なくしゃみをしているだろうと考えると、龍樹には少し笑えてきた。

「しかし……………」

龍樹は楽しそうに談笑している流華を見遣った。

龍樹の視線には気付かず、彼女は構わず雑談を続けている。

「すごい人気だな」

「現在校内女子人気投票の結果第8位。俺はああいうタイプは嫌いなんだけどな。でも、これからも順位を上げ続けるだろうな」

またもや耕治の情報の仕入れルートが気になった龍樹だが、聞くだけ無駄だと判断し、追求を断念した。

少し間をおいてから、龍樹は思い出したように言った。

「ってか、千尾川つてことは飯島北も来るんじゃないのか？」

「そりゃそうでしょ。標的の正体が分かって無いから強いのを送ってくるのは間違い無いだろうな」

飯島市には全部で4つのN?を設置している高校がある。

飯島市の中心に位置する飯島高校。

そこから5km北に行ったところにある飯島北高校。

飯島高校から東に17km程行った所にある飯島東高校。

飯島北と飯島東を直線で結んだ時のちょうど中心に位置する私立海^{かいえ}円^ん高校。

その他にも小学校、中学校、市役所などにもN?が置かれており、妖怪を殺すことで貰える賞金で生計を立てている賞金稼ぎと呼ばれるN?も珍しくはない。

ちなみにN?というのは、妖怪と戦う者全てをひっくるめた呼称であり、学生のみには適用されるわけではない。

「まあ、人が死んでるから小学校、中学校は動かないだろうし市役所の人員割くわけにもいかないから、やっぱり動くのは北の連城か井森だろうな」

「井森はやめてくれ」

龍樹は飯島北高校に知り合いの顔を思い浮かべ、苦々しくそう呟いた。

「賞金稼ぎは『サソリ』が近くにいるけど只今出張中。やっぱり北が本命だな」

「……いつも思うんだがそのコードネームみたいなのは何なんだ？」

「本名出して妖怪殺す奴の方が少ないって。下手すりゃ公認されて

いる俺らみたいな賞金稼ぎから邪魔物扱いされて報復攻撃受けるからね」

話し終わると耕治は割り箸を弁当の中に入れて、蓋を閉め、その上から輪ゴムをかけ、ゴミ箱にシユートした。

まだ半分以上残っていた弁当の中身を見ていた龍樹は小さく

「もったいない」

と呟いた。

吸血鬼(2)〜生じる疑念〜

放課後、飯島高校の生徒の大半が退室する中、龍樹は1人で机に向かつて一心不乱にノートを写していた。

今日の授業はほとんど夢の中で受けていたので、耕治から借りた全5教科のノート写しはかなりの重労働である。

「ふふふ、鎌田くんたいへんそうだね。手伝おっか？」

声の主は本日のMVPこと鬼頭流華であった。
が、龍樹にはわざわざ流華の顔を確認する暇すら無い。

「いや、自分でやるさ」

「釣れないなー。こんな可愛い娘が手伝ってあげようって言うてるのに」

「自分でそれを言うか」

流華は龍樹のノートを覗き込み、感嘆の声を上げた。

「すごっ、こんな綺麗に字って書けるの？」

「ありがとよ。だけど、そんな褒める程の出来栄えでもないだろ？」

「私と比べたら十分上手いって」

流華はどこから取り出したのか自分のノートを開いた状態で見せる。

これには龍樹も苦笑した。

中学生でももう少し上手く書けるだろう。

「ねえ、字教えてよ。字」

「……は？」

「いや、そのままの意味」

「何で俺なんだよ」

「何だっていいじゃん。教えてよ」

龍樹はそんな面倒なことをしてる暇は無いと断るつもりだった。

だが、一つの考えが浮かび、その言葉を飲み込んだ。

龍樹の目が鼠を見つけた猫のように輝いた。

龍樹は机に置いてあるノート4冊の山を軽く叩く。

「これ全部写せ」

「ええっ!？」

「字がうまく書けるようになるにはとにかく字を書く。これ以上とない理に敵ったやり方だろ？」

「そんなー！もっと修行みたいな感じのやつにしてよー！」

「お前にはまだ早い！！！」

「うっ………鎌田くんの意地悪」

と、泣き言を漏らしつつも流華はノートの山に手を伸ばした。

が、龍樹の脳内に流華の字が上手くなってほしいという願いなどこれっぽちもない。

流華の手伝いもあり、ノート写しがもう少しで終わりそんな雰囲気
を醸し出してきた時であった。

突如、絹を裂くような悲鳴が校内に響いた。

「何だ！？」

龍樹は反射的に立ち上がる。

流華も驚愕の表情を浮かべている。

そして、流華は何の前触れもなく龍樹に一気にまくし立てた。

「鎌田くん、すぐ救急車呼んで！急がないと間に合わないから！」「
言い終えると、流華は疾風のごとく走り去っていった。

龍樹もすぐに後を追って廊下に出たが、流華の姿は無かった。

龍樹は舌打ちをして、119番をしようとして携帯を出したが、先ほどの流華の言葉の不自然さに気付いた。

1つは何故救急車を呼ばなければならぬと彼女は思ったのか。

もう1つは急がないと間に合わないとはどういうことなのか。

「おい、龍樹！！」

翔良の呼びかけで龍樹は我に返った。

「どうした、翔良」

「妖怪が校内にまで出やがった。下で体中に穴開けて血流してる女子が倒れてる。まだ犯人は近くにいます。探すぞ！」

「ああ。その前に119番は？」

「もうした。行くぞ」

翔良の後に続いて龍樹は走り始めた。

同時刻、飯島北高校会議室にて2人の男子生徒の会議が行われてい

た。

片方は喧嘩っ早そうな雰囲気を放ち、口調も荒々しい髪を金に染めた少年。

もう片方は金髪の少年とは対称的に冷静な態度で切れ長の目つきを光らせる黒髪の少年。

「つまり今回の敵は吸血鬼ってことだろ？連城ちゃんよ！」

「そのちゃん（・・・）は止める井森いもり。と、言ってもまだ調査段階だが十中八九当たりだ」

「しかしよ、こんな俺らと同じくらいの年齢に見えるガキが妖怪だとはな、恐ろしい世の中だ」

「容姿が端麗すぎるのはむしろ妖怪だろう。その写真通りだ」

「人間だったら是非とも俺のものにしたかったんだがな」

「下手な情はかけるな」

「そんなことする訳無いだろ、この俺が！」

「分かったなら良い」

「で、いつ動くんだよ」

「そうだな・・・・・・・・・・5日後くらいには存分に暴れてもらおうか」

「5日か・・・・・・・・・・まあいいさ。今日の俺はハイだからよ！！」

下卑た笑い声を発しながら井森はアサルトライフル、H&K G36を乱射し始めた。

発砲音と共に壁に留められていた鬼頭流華の写真はあっという間に蜂の巣から紙屑へと変貌を遂げた。

吸血鬼(3)く友だち

翌日、龍樹は体育館で校長による昨日の事件のあらましをぼおつと聞いていた。

七人ミサキの時は学校内での事件ではなかったからそんなには騒がれなかったが、今回はその校内で事件が起きてしまったので、全校集会が開かれた。

昨日の被害者の女子生徒は発見が早かったことも幸いし、一命を取り留めたいが、学校でも今後の方針を決めるからだからなのか今日は現在行われている全校集会と学活だけで終了である。

「と、いうわけでこの度はこのような不幸な事件が起きてしまい、今日から3日間は臨時休校といたします」
校長がそう締めくくり、生徒達は歓喜し、教師達は落胆した。

龍樹が帰りの準備をしていた時であった。

「鎌田くん」

期待を含んだ声で龍樹は自分の名前を呼ばれた。

龍樹は振り返り、少し驚きながらも返した。

「どうした鬼頭？」

「流華でいいよ」

「分かった。で、どうした？」

流華は少し怒ったような声で返した。

「ひどいよ！昨日字教えてくれるって言ったじゃん」

ちなみに龍樹は今日も教えるといった覚えはない。

だが、このまま帰るのも悪く思ったので素直に教えてやることにした。

「分かった分かった。良いから場所移すぞ」

龍樹はクラスメイトの視線を感じながらも歩き始めた。

——飯島市立図書館——

2人は飯島市の西に位置する図書館に来ていた。

この図書館は利用者がほとんど居らず、全部で12個設置されている内のテーブルは10個も空席である。

かといって本を選んでいる人影もあまり見受けられない。

蔵書数も少なくはなく、内装も綺麗、近くに大きな図書館があるというわけでもないのに人気が無い。
それが飯島市立図書館である。

「だからとめはきちつと止める。はらいも雑にするな」
「うっ………難しい」

流華は龍樹のスパルタ教育によってしごかれていたところだった。

「鎌田くん、お腹空いた」

「紙食え」

「山羊じゃないんだからさ……」

「字を書いた紙を噛まずに飲み込むと字が上手くなるんだぞ」

「……本当？」

流華は僅かな人目をはばかりながらもクシャクシャに丸めたノート
の切れ端を飲み込んだ。

ちよつと流華に字を教えるのが楽しくなってきた。

「じゃあ、ここからここまで全部覚えとけよ。学校始まつたらテストするから」

が、答えは返ってこない。

夕日で染まった図書館内は流華の周りだけまるでモノクロ映画のよ
うな暗さを備えている。

龍樹の帰り際に流華は一言「燃え尽きたぜ……」と、呟い
た。

図書館を出るとすぐに携帯が鳴った。

「もしもし」

「やはり男の声というものは……」

電話の相手は珍しく零治であった。

「お前から電話かけてくるなんて珍しいな」

「ああ、吐きそつだ。早く切りたいから用件だけ言つぞ」

「どつぞ」

「委員長命令で明日は一日中犯人捜し。おそらく明後日もだ。以上」

「今日は何も無いのか？」

「今日のことは僕は一言も言つてない。分からないのか？無知なのか？だから男は」

「ああ、はいはい分かりました。バイバイ女好きの零治くん」

零治の続く言葉を言わせないうちに龍樹は電話を切った。切るとほぼ同時にタイミング良くメールが来た。

どうせ委員長だろうと思って確認してみると全く違った人物であった。

「――鎌田くん！女の子を置いて一人で帰るってひどくない？」

語尾には怒った顔の絵文字。

そして、一行空いて――明日も字教えてよ――という一文。

言うまでもなく流華からである。

龍樹は

「――分かった。明日は夜になるけどいいか？来れるなら9時くらいにどこかで待ち合わせしよう――」
と、返した。

少し遅れて龍樹が寮に着いたら

「――私は良い友達を持って幸せだよ！じゃあ図書館の近くのファミレスでね――」

と、いった文面が返ってきていた。

「……………俺の新しい友達は1年ぶりくらいか？」

龍樹はついつい友達という単語に口を緩めてしまった。

吸血鬼(4) ～確立する疑念～

「で、結局犯人は見つからなかったのね」

いずみがやはりいつもと同じ口調で確かめるように尋ねた。

しかし、怒ってはいないようだ。

龍樹はそれが分かっているもやはり申し訳ない気分になった。

「まあ、そうなりますね。3日も探したってのにすいません」

校内での騒動が起きてから3日間、裏・風紀委員は血眼になって犯人の行方を追ったが依然その足取りは掴めていない。

4日目の今日も搜索は難航するだろう。

沈黙を打ち破ったのは耕治だった。

第三会議室の扉を乱暴に開けて、座る前から興奮した様子で話し始める。

「やべーよ、リユーちゃん。ビッグニュースだ！」

「まずは委員長に挨拶しろよ」

龍樹の注意を素直に承諾した耕治はいずみに軽く会釈して続ける。

「犯人が分かっちゃった」

龍樹といずみは思わず身を乗り出した。

椅子が倒れたが、2人とも気にも留めない。

いずみが耕治に尋ねる。

「耕治くん。それは、誰なの？」

「俺の同じクラスの鬼頭流華ですよ」

龍樹は驚きから目を見開き、耕治を見つめた。

耕治は辛そうに龍樹から目を背け、カバンから何枚かの紙を取り出した。

紙はどこのサイトからコピーしたのか、何と警察の資料だった。

龍樹もいずみもそんなことは慣れっこだったので、黙って資料に目を通す。

「まず、奴の家族構成。2031年に実在した吸血鬼、鬼頭昭一きとうしやういちがご先祖様です。奴はD町28人殺しの犯人です。警察は鬼頭昭一本人とその妻、そして娘2人は仕留めましたが、当時2歳だった孫だ

「けは行方不明です」

そこで龍樹が怒気をはらんだ口調で異議を申し立てた。

「待てよ、それで今17歳の学生ってありえねえだろ」

「リユーちゃん。相手は吸血鬼と人間のハイブリッドだぜ？1歳にも満たない赤子から死にかけの老人まで姿は変幻自在だ」

「顔が割れてるなら話が早いわ。一気に」

いずみの続く言葉は龍樹がテーブルを殴った音でかき消された。

「あいつが……そんな」

龍樹は彼女に特別な感情さえ抱かなかったが、普通の友人としてはこの短期間でかけがえのないものとなっていた。

いつものように字を教え、いつものように昼食を一緒に食べ、いつものように別れの挨拶をする。

そんなありふれた友人だったが、彼にとってただでさえ少ない友人を手にかけなければならぬというのは少々重荷だった。

「リユーちゃん。俺だってあいつを嫌いだけど流石にあいつを殺したいとは思わない。でも、これが現実なんだよ」

耕治が冷たくそう言い放った。

龍樹はいずみと耕治の制止も振り切り、1人走り出した。

向かう先は流華の待つ2-Cだ。

「あー、鎌田くん。どうしたの？そんなに息上げて？」

いつものように放課後残って字の練習をしていた流華は龍樹に屈託のない笑顔を見せた。

龍樹は深呼吸をして心を落ち着かせてから、ゆっくりと聖書の序文を読み上げ始めた。

彼は聖書の内容をほとんど全て暗記している。

流華はそれを聞き、狂ったようにのた打ち回り始めた。
悲鳴まで上げている。

龍樹が聖書の朗詠をやめると同時に流華もピタリと動きを止めた。

「か、鎌田くん……………」
「鬼頭……………お前」

流華は何の前触れもなく、龍樹に掴みかかってきた。

力が尋常じゃないほど強い。

龍樹は床に押し倒され、首を絞められた。

この細い体にどこにそんな力があるのだろうか？

まるで万力で挟まれているかのように龍樹は感じられた。

「き・・・・・・・・鬼頭・・・・・・・・う・・・・・・・・そ・・・・・・・・
だろ？」

龍樹の問いには答えず、流華は首から両手を放そうとしない。

それが答えでもあるのだろうか。

だが、流華はまるで自分でもこんなことしたくないといった悲しそうな顔をしている。

これすらも計算ずくなのか？

龍樹にはそうは思えなかった。

龍樹の意識がまどろみかけたその時、流華の頭を何かが通過していた。

流華は囁くような感情的な声を上げた。

と、同時に流華の両手から龍樹はようやく解放された。

龍樹はすぐに事態を察し、振り返った。

向かいの校舎の開いた窓からモーゼルKar98kの銃身が覗いていた。

すぐに2発目の8ミリ・モーゼル弾が流華の右胸に着弾した。

流華は鮮血を上げながら床に倒れる。

だが、倒れていた時間はほんの一瞬。

流華はすぐに起き上がり、次弾に備えたがその行動はどつやら無駄だったようだ。

龍樹が自分の目の前で手を広げて立っている。

そう。まるで自分を守る盾のように。

流華は小さく舌打ちをすると、教室の窓ガラスを割り、飛び降りた。

龍樹は流華を追ってすぐに下を見下ろしたが、既に流華の姿は無かった。

呆然としている龍樹に直哉は声をかけるか迷った。

だが、その役は翔良が買って出てくれた。

「明日の朝早くに鬼頭……いや、吸血鬼を仕留めることになった。相手が相手だけに全員出勤らしい」

しばしの沈黙の後、翔良は

「勿論俺と剛太先輩は例外だがな」

と、付け加えた。

龍樹は曖昧に頷いただけだったが、その眼には確かな決意が宿っていた。

吸血鬼(5) ～傑作小銃G36vs駄作小銃G11～

朝日に照らしだされた山の入り口は妖しげな輝きを放っている。

ついこの間、七人ミサキが出没したあの裏山である。

耕治の謎の情報網によると最も流華が隠れた可能性が高いのはここだったのである。

N?の面々、いずみ、佳奈、直哉、零治、そして龍樹。

佳奈が無言で先陣を切って歩き始めた。

続いて零治、その後ろにいずみ、龍樹、直哉の順で山内へと踏み入っていった。

前を見たままはいずみが龍樹に尋ねる。

「龍樹くん？覚悟は出来たかしら？」

「正直……まだあまりです」

「あれは妖怪なのよ？七人ミサキの時とは違って生まれた時から」

龍樹の脳裏に高田の顔が浮かぶ。

「仮に妖怪だとしても友だち（……）でしたから」

「そう。でも、その甘さがあなたの寿命を縮めることになるのよ」

「俺たちはもう死んでるようなものでしょ？精神的にも肉体的にも社会的にも」

いずみはその問いには答えずに妖しく笑っただけだった。

それから5分も経たない内に先頭の佳奈が歩みを止めた。

「誰かいる」

すぐに全員が臨戦態勢を整えた。

目の前には金の髪を立て、黒いサングラスに黒のベスト、迷彩柄のパンツ姿の高校生くらいの少年が笑みを浮かべながら立っていた。

「1 / 2 / 3 5人か。案外少ないじゃねえか」

少年はそう呟いて不満そうに口を尖らせた。

だが、少年が龍樹の姿を見つけると嬉しそうに笑みを浮かべた。

「龍樹じゃねえか。元気い？」

「相変わらず喜怒哀楽が激しい奴だ」

直哉が後ろから小声で尋ねた。

「この人誰ですか？」

「飯島北の自己中担当……井森宏明」

「自己中担当とはひでえな。俺は」

そこでセリフを一度切り、背中にかけてあった小銃、H&K G36を手に取り、龍樹たちに向かって発砲してきた。

そして、撃ちながらセリフを続ける。

「特攻隊長だ!!」

龍樹たちは一斉にそれぞれの方向に散って行った。

ただ一人を除いて。

直哉のみは状況が飲み込めずにただそこに立ち尽くしていた。

「一匹もらいー!!」

井森が直哉にG36の銃口を向けた。

直哉は恐怖から両手を前に突き出した。

だが、彼に銃弾が着弾する前に射撃音が井森の左肩を抉った。

「つてえ!!」

井森は続く銃撃を避ける為、大木の背に寄り掛かった。

一度、銃声が止み零治の問いが井森に投げかけられる。

「その銃はG36だな？」

「……………ああそつだ」

「……………未だに謎だ。ドイツ軍は何故そんなごみを正式採用したのか。

確かにこいつはその銃に性能的には劣る。だが、見るこのライン。究極の美じゃないか」

零治はうつとりとした表情で自分の愛銃G11を撫でた。

彼は自分のセンスが悪いなどこれっぽちも思っていない。

もちろんそんなことは知らない井森は引き攣った表情で言葉を返した。

「だつせえ！！G11？そつちのがごみだろ！」

瞬間、零治の心のスイッチが入れ替わり、悪魔を髣髴させるような邪悪な笑みを浮かべた。

「出てこい、僕のセンスを否定するとはいい度胸だ。顔くらい見せる。死んだ後も2日は覚えていてやる」

井森は素直に木陰から出てきた。

「随分と腕の細い兄ちゃんだな。ドンパチできんのかよ？」

森中に銃声が響き渡り始めた。

「始まったっポイね」

パジャマ姿の眼鏡をかけた白人の少女がハンバーガーを咀嚼しながら相棒に呼びかけた。

だが、相棒からの返事はない。

「行ってきなよケント。私はここでボーガイコーサクしてるから」

ケントと呼ばれた少年は拳銃、H&K P7M8を片手に振りかえった。

少年の体は小さく線は細い。
その体型には不釣り合いな獣のような目つき。

いや、彼には何故かその目つきは似合っている。

ケントはヒッターと奇声を上げながら走り去っていった。

少女はそれを見送ると次のハンバーガーに手を出した。

直哉は龍樹に無理やり引つ張られ、銃撃戦地から1000mは離れた場所に連れてこられた。

1000m程度ではまだ狙撃される可能性があったので、2人は岩場に隠れた。

開口一番龍樹は直哉に文句をつける。

「何、ぼおつとしてんだ馬鹿。次は死ぬぞ？」

が、直哉も反論する。

「何ですか？」

あの人は飯島北の人ですよ？一緒に仕事すれば早く」

「ああ、早く仕事は終わるさ。だが、俺たちはいつでも金欠だ。向こうだって報酬は多い方が良くないと思ってるんだ」

「だからっていきなり銃撃戦するって……殺す気ですか？」

「ああ、向こうは少なくとも殺す気だ」

直哉は面食らって何も言い返せなかった。

「いいか。前にも言ったように俺たちはもう死人同然なんだよ。

化け物に殺されようと人間に殺されようと誰も悲しまない。また新しい駒を買わなきゃくらいにしか思われねえ。

他のN？に出会った時点で、報酬の奪い合い……即ち殺し合いは確定なんだよ」

「でも」

「でも何もねえ。大体、さっきあのままだったらお前死んでたぞ」

「……………はい。分かりました」

直哉の心情はまだ龍樹に納得はしていなかったが、先ほどの事実もあつたため肯定するしかなかった。

「いずみ先輩と佳奈先輩大丈夫ですかね……………」

「零治はいいのか？」

「何となくあの人は大丈夫な気がします」

「んなアバウトな……………」

龍樹はいずみ達と連絡しようと携帯を取り出した。

液晶画面を見て眉をひそめた。

「圏外か……………いや、それだけじゃないな。こりゃ」

直哉も龍樹の不審な態度を感じ取って自分も携帯を開く。

携帯の画面には不自然な乱れが生じている。

「妨害電波ですかね？」

「そんなところだろうな。こんなに強い乱れとなるとかなり大掛かりな物を使っているんだろうな」

ため息をつき、龍樹は携帯を閉じた。

直哉も伝染したのか消沈しきった顔でため息をついた。

龍樹は直哉をたしなめるかのようにパンと手を叩き、歩き始めた。

「とりあえず、まずは吸血鬼を優先するぞ。あれさえ叩けば全て終わりだ」

出来れば吸血鬼に会わずにこのまま帰りたい。

そんな思いを振り切って直哉も龍樹の後を追った。

吸血鬼(6) ～刀を語る～

いずみと佳奈は龍樹たちとは全く別方向を歩いていた。

その事に彼女たちは気付いてはいなかったが、彼女たちは龍樹たちのことなど全く気にしてはいなかった。

問題はこの組み合わせにあった。

「どうしましょうかね」

「とりあえず進むしかないじゃん。携帯も使えないみたいだし」

「佳奈ちゃん、年上には敬語を使わないと」

「佳奈はあなたと翔良だけはどうしても好きになれない」

「で、龍樹くんはOKなの？不思議ね」

佳奈が右腕をいずみの後頭部に突きつけた。

いずみはその意味が分かってないかと思うほど落ち着いている。

「焦がすよ？」

「あら、怖い。余程龍樹くんのこと慕ってるのね」

「龍樹は……佳奈に生きる希望をくれたから」

「そう。まあ、どうでもいいわ」

いずみの行動は佳奈にとっても物陰に隠れていたケントにとっても予想外だった。

いずみは腰に差していた愛用の日本刀を抜くと、ケントの隠れている茂みにそれを投げた。

刀が腹に刺さった状態でケントは背後へと飛ばされた。

「防刃チョッキ……かしら？」

「気付いてたのかよ。完璧に気配消してたつもりだったんだけどよ」「そうね。女のカンって奴かしら？」

ケントは防刃チョッキに刺さっていた刀を抜くと、それを後ろに放り捨てた。

そして、レッグホルスターからハンドガンH&KP7M8を抜き、発砲。

9mmパラベラム弾が2発いずみの傍を通過した。

「どいてー!」

佳奈はいずみを突き飛ばし、ケントに照準を定めて火炎放射を行う。

ケントは佳奈の攻撃を予測して、火炎放射が行われる前に素早く右に跳んだ。

「危ねえな、もうちよいでレアじゃねえか」

「ミニディウムになるまで焼いてあげる」

佳奈はさらに火炎放射を行う。

ケントはそれもかわして物陰に隠れた。

隠れながら反撃とばかりに佳奈に撃ち返してきた。

佳奈は上体を低くして銃弾をかわす。

「あなたも援護してよ！」

いずみは先ほどからずっと突っ立ったままで彼らの戦闘を見ていた。

極限状態での佳奈の叱責もいずみはのらりくらりと返した。

「武器が無いもの。取りに行ってくれる？」

「そんなの自分で行ってきなよ！」

いずみは眼鏡の位置を直すとゆっくりとした足取りでケントの方へと歩き出した。

ケントは格好の的であるいずみの方に狙いを定めて引き金を引いた。

しかし、銃弾は発射されない。

「な………!?!」

「H&K P7M8の装弾数は8発。弾切れみたいね。私が刀を取りに行くのとリロードが済むのどっちが早いかしらね」

「うるせー!!お前らは黙って俺の的になれ!」

ケントは空になった弾倉を捨て、予備の弾倉を薬室に入れる。

だが、それよりも早くいずみの懐に隠し持っていた小刀がケントの左腕を貫いた。

「うああああああっ!!」

ケントは痛みから拳銃を取り落とし、もがき苦しみだした。

いずみは拳銃を遠くに蹴り飛ばし、ケントの左腕に刺さっている小刀を抜き、今度は彼の右手を貫き、そのまま地面に刀を突き立てた。

ケントの右手は地面に磔にされた。

佳奈が怒りの表情を浮かべて文句を言う。

「武器無いつて言ってたじゃん」

「こんな小刀、武器の内に入らないわよ。自決用のつもりだったし」

いずみは更に深くケントの右手に刺さっている小刀を地面にねじ込んだ。

ケントから上がる悲鳴は更に大きくなった。

「さて、拷問の時間ね。佳奈ちゃん、向こうに落ちてるはずのアレ……持ってきて〜」

「だから自分で行きなよ」

「誰のお陰で無力化クレアできたと思ってるの？ さ、早く早く」

いずみの言とおりであったのが腹立たしかったが、渋々佳奈は刀が落ちているであろう茂みへと踏み込んでいった。

吸血鬼（フ）殺してくれとあいつは言った

井森は地面に仰向けに寝転がっていた。

夜空を見る為というロマンチックな思考は勿論彼は持ち合わせていない。

痛みと疲れで立つことさえも困難な状況だから寝転がっているのである。

その手にG36は握られていない。

そして、体の何か所かに刻まれている銃創。

急に弾が当たっていないのは不幸なのか幸福なのか、彼にとっては何ともしない不幸だった。

零治がG11を構えながらゆっくりと井森に歩み寄ってきた。

憎々しげに井森は呟いた。

「はあ………くそっ、こんなゴミみたいな銃に負けるなんて」

「生憎だが、どんなに良い銃を持っていても使う人間の技量によってその銃は金にもゴミにもなる。」

別に君の使い方が悪いわけじゃない。僕の使い方が君以上に良いというだけさ。

だが、これでG36対G11の決着はついたかな」

「………ちっ！」

井森は寝転がったまま両腕を大きく広げた。

「ん？」

「殺せ。尋問に掛けられるよりはマシだ」

井森はこの時になってようやく自決用の武器の類を持ってこなかったことを思い出した。

というより彼は一度もそんな物持ってきたことがない。

ケントは恐らくあの拳銃を代用できるがあの性格だと自決なんてしないだろう。

だが、零治の答えは井森の予想とはかけ離れたものだった。

「嫌だ。僕は気の強い奴、男でも女でも良いがそいつが無様な姿になるのを見るのがとつても好きなんだ。

君にはもう少しそこを虫のように這いつくばっていてもらおうか」

言い終えると、零治は井森の両足を撃った。

井森は短く悲鳴を上げて零治の顔を見上げた。

彼はさも愉快であるかのように嘲笑していた。

誰の事かは言うまでもない。

こんな表情であろうと世間一般では彼の顔はイケメンの部類に入る。

零治は井森に背を向けて歩き出した。

零治の背中に怒気を含めた言葉が浴びせられた。

「井森宏明、お前を殺す男の事だ。覚えておけ」

「そうか。じゃあまた会おうか、宏明くん」

龍樹と直哉の吸血鬼との遭遇はかなり突発的なものだった。

先頭を歩いていた龍樹のつま先に何か当たった。

流華はぐっすりと眠っていた。

その表情だけ見るとやはり彼女が吸血鬼とは直哉にはどうしても思えなかった。

そう言えば、彼女は何故太陽が出ている昼間も活動できたのだろうか？

彼はふとそんな疑問を感じたが、これから彼女の息の根を止めるのにそんなことどうでもいいかと思いついて直して流華の頭にKar98kの銃口を突きつけた。

小声で直哉は龍樹に尋ねた。

「ターゲットですよね？」

「ああ。その通り、だ」

龍樹は言葉を途中で言葉を切り、直哉の頭をグロックで殴りつけた。

うっと短く直哉は唸ると、彼はパツタリと倒れこんだ。

直哉は何が起きたかも分からず混乱した頭のまま意識を失っていた。

「悪いな直哉。……おい、起きろ」

龍樹は流華の頭を軽く蹴った。

流華はそれだけで飛び起き、龍樹から距離を取った。

彼女は自分の頭を蹴った者の正体を知ると、目を見開いた。

「鎌田くん？」

「おはよう流華。いや形式上ここは吸血鬼か」

流華は吸血鬼という単語に一瞬反応し、龍樹に飛びかかるうとしたが彼の右手のグロック17を見て、動きを止めた。

彼の銃は真っ直ぐ流華の心臓に狙いを定めている。

「No value。聞いたことあるだろう？」

「意外。鎌田くんみたいなのがメンバーなんて」

流華は服が汚れるのも構わずその場に座り込んだ。

龍樹もそれに倣って座り込む。

だが、銃口の向きはそのままだ。

背の高い草から垂れる朝露が龍樹の頬に落ちた。

お互い言葉を発さず周囲の虫の声がやけに大きく聞こえた。

流華が諦めたような口調で龍樹に話しかける。

「私を殺すんでしょ？」

「殺せるならお前を起こす前に殺してた。俺はお前に死んでほしくない」

「私が妖怪でも？」

「ああ」

「No ? a l u e の上司が私のことを殺せって言うても？」

「ああ」

「私が今この瞬間に龍樹を殺そうとしても？」

「いいからここから逃げてほしい」

「私の質問に答えてないじゃん」

「答えの出ない問題ってのはあるものだ」

「何それ、馬鹿みたい」

流華は声を上げて笑った。

龍樹は小馬鹿にされたようで腹が立ったが、子供のように無邪気に笑い声を上げる流華を見てそんな気持ちは消えた。

ひとしきり笑い終えた流華は龍樹に尋ねた。

「どうして？私は化け物だよ？それを殺すのが仕事じゃないの？」

「他のメンバーだったらそうしてただろうな。

自慢じゃないが俺はあのメンバーの中で一番情に脆い」

「嘘つき」

「嘘なんかつかねえよ。

俺のことも何もかも忘れて別の地で幸せに暮らせ」

「鎌田くんが私を幸せにしてくれるって約束したじゃない。お前を幸せにしてやるって言ったじゃない」

「お前の方が嘘つきだ」

流華は押し黙り、品定めするかのような視線を龍樹に向ける。

10秒、もしかしたらもっと短かったのかもしれない。

流華は静かに龍樹に尋ねた。

159

「私は今回の事件には関わってない。……って、言ったら信じてくれる？」

「信じてやる」

「私、犯人に心当たりがある。あの女生徒の傷からして多分今回の吸血鬼の犯人は……」

それはまるで壊れた人形のようにだった。

拷問を受けて必要な情報は全て引き出されたケントにはもう敵への抵抗の色すら見えない。

佳奈はあまりに残酷なはずみの拷問の残骸を見なくなかった為、あらぬ方向を向いたままはずみの報告を聞いていた。

「どうやら敵はあの子も含めて3人。内1人はほとんど衛生兵みたいなもので戦闘能力は皆無。

携帯が使えないのはこの子の使ってる妨害装置が原因みたいね」

「もう1人は井森のこと？」

「でしょうね。まあ、零治くんの勝利は确实だから井森からの不意打ちは無いものと考えて良いわね」

いずみがそう言い終えた時だった。

ケントのものと思われる叫び声がすぐ近くから聞こえた。

いずみと佳奈はすぐにケントの方を振り向いた。

ケントは口をパクパクさせながら体を痙攣させている。

その体がみるみるやせ細っていくのである。

彼の体はいまや骨と皮がほとんど触れあっており、ショックで対の目玉が飛び出し、地面に不快な音をまき散らす。

その様子はまるで生きながら体内をピラニアに食い荒らされているようであった。

彼の体には大量の針のような物が突き刺さっている。

それはチューブのようになっているようでケントの体から血液や臓器を吸い取っているようであった。

その証拠に針のような物の中を何かが流れている様子が外側から見てもありありと分かった。

「どうやら吸血鬼って言うてもヴァンパイアではないみたいね」

いずみはゆっくりと抜刀し、刀を構えた。

吸血鬼(8) (飯島北高校戦線離脱)

物には何故か2つの名前があったりする。

ほとんど変わらないはずなのに地方によってその呼び方は様々である。

身近なところで言えば方言がそれにあたるだろうか。

その定義は妖怪にも当てはまる。

「始まったみたいですね」

白人の少女が井森の傷に応急処置を施しながら呟いた。

彼女はこんな時でもハンバーガーだけは手放さず、時折それに齧り付きながら応急処置を続ける。

「今回は俺たちの負けか……。
そっぴゃよ、バレンシヤ」

白人の少女、バレンシヤは無言で手当てを続ける。

応答は返って来そうにないので井森は勝手に言葉を続けた。

「今更なんだが、妨害電波の電源切って良かったのか？」

「飯島高校の味方をするつもりはナイですけど、もし妖怪と飯島高校のメンツが遭遇したらワタシたちは安全にここを脱出できるじゃないですか。まあ、遭遇するとカクテイしたわけじゃないですけど、それにあの妨害装置をここに置きっ放しってのもモツタイナイです」

「そういえば、本部の連城ちゃんに連絡忘れてたな。ついでにその妨害装置の回収も頼んでおくか」

「お願いします」

寝転がったままで井森は連城に電話を掛ける。

数回のコールの後、連城は電話に出た。

「……………どうだった？」

「敗走敗走。ケントが死んだ」

「……………了解。」

残念だ。迎えに行った方が良いか？」

「大きめのトラックか何かと力強い奴何人が連れてきてくれ。妨害装置の回収しなきゃいけねえからな」

「分かった。」

「一応、警戒だけは怠るなよ」

「安心しろ。入口のすぐそこに居るからいざとなったら近隣住民にでも匿ってもらおうさ。」

「じゃあ」

井森は電話を切り、再び自分の傷口に目を向ける。

バレンシヤは傷口に包帯を巻き始めているのでもうすぐ終わるだろう。

「妖怪の正体……知りたいデスカ？」

必要なこと以外をほとんど喋らないバレンシヤにしては珍しいことだった。

井森は少し驚いたが、黙って頷いた。

「今回の件の犯人はヴァンパイアじゃないですよ」

「………何でそんな事黙ってたんだよ」

「黙ってたのは悪かったとハンセイしてます」

そう言いつつもバレンシヤの表情からは反省の色は見受けられなかった。

井森は憤慨して掴みかかろうとしたが、傷が疼き一言唸っってもう一度横たわった。

バレンシヤは少し顔をしかめて井森に注意した。

「傷口は浅くはありません。動かないでクダサイ」

「お前、何考えてやがんだ？」

「だからハンセイしてるって言ってるじゃないですか。ついつい言うタイミングを逃してしまっただけですよ」

「ほう。うちの高校にはお前とケントを抜きにしても11人N?が居るんだが？」

「しかも時間ならたっぷりあっただろう？」

追い詰めるような口調で井森はそこまでまくし立ててから彼は気付いた。

彼女は表情一つ変えずに先程から自分の手当てをしている。

もし彼女に置いてかれたりしたら？

傷で動けない状態で妖怪に遭遇したら？

仮に妖怪に遭遇しなくても飯島高校のN?に見つかったら？

恐怖で井森は震えだした。

その様子を察知したのかバレンシヤは比較的優しい口調で井森に声をかける。

「大丈夫です。」

怒られたハライセにここに置いていくだなんてコドモっぽいことはしませんよ。

それにワタシの計画にアナタは必須だとワタシは思っています。」

「け……………計画？」

「ええ。今は話せませんがタノシミにしてください。」

この瞬間、バレンシヤは初めて少し笑った。

その笑みはまるで感情が読み取れない不思議な笑みだった。

「お前は……………何なんだ？」

「ちゅあっ？」

「……………あ、手当て終わりました」

バレンシヤは立ち上がり、先に出口へと向かって歩き出した。

井森はゆっくりと立ち上がる。

ほとんど痛みが無い。

痛み止めが効いていると言えは確かにそうなのだが、それにしても違和感がない。

応急処置どころか完治させてしまったのではと錯覚するほどだった。

「そうそう。」

サッキ言いきびれたけど今回の件の犯人はおどろおどろ又はおとろしと呼ばれるものです」

そこで一度言葉を切り、バレンシヤはふと気づいたかのように続けた。

「今度はワスレスズに言えました」

吸血鬼（9）く戦況をひっくり返す核弾頭く

4.73mm x 33ケースレス弾が妖怪の皮膚に食い込む。

だが、決定的なダメージは与えられていない。

「硬い。装甲車並みか？あるいはそれ以上？」

零治は空弾倉を捨てて、次の弾倉を装填し、またケースレス弾を撃ち続ける。

妖怪は大きな赤い目をギロリと零治の方に向ける。

妖怪の身体は大きな首のみであり、長い無数の髪の毛の合間から大きな目と口が覗いている。

そして、その大きな口に見合うほどの大きな牙。

「おどろおどろだね」

「佳奈、それ以上言うな。信じたくない」

零治はいつも通り女性には微笑みを見せる。

だが、見せつつも佳奈に対して否定的な発言をする。

おどろおどろは髪を鞭のように撓らせ、零治に向かって突く。

零治は寸でのところでそれをかわす。

先程まで零治が居た場所には針金のような鋭さを持ったおどろおどろの髪が突き刺さっている。

髪を抜こうともがいているおどろおどろにいずれみは接近し、頭頂部を狙って切落を行う。

残念ながら一刀両断とはならず、15cm程刀がいったところで

いずみは刀を引き抜き、距離を取る。

折角付けた切り傷も妖怪の再生能力ですぐに回復してしまったが、いずみはおどろおどろの牙が自分に向かってくるのを見越しての行動であった。

「厄介ね」

「いずみさん、奴は硬い。しかし、言うほど早くもない。」

実際、いずみさんがほぼゼロ距離の位置から攻撃しても中々反撃してきませんでした。

佳奈の火炎放射で仕留めるのが得策かと」

こんな時でも零治は声色を変える。

いずみはその声色が気に入らなかったが、実際に彼の言つとおりである。

しかし、佳奈が慌てて宣言する。

「でも、もうガソリンが切れそう！」

「あと何回分かしら〜？」

「1回撃てれば良い方！」

「ケント君との戦闘で使い過ぎたわね〜」

「外した時は考えたくもないですね」

そう言いつつも零治からは焦った様子は見られない。

それだけ佳奈の腕を信用しているのだろう。

零治は話している間もずっと弾幕を張っていたが、やはり効き目は薄い。

おどろおどろが再びこちらに髪を伸ばしてこよつとした瞬間、おどろおどろの背後から銃声が聞こえた。

小銃や機関銃のように連続した発砲音ではなく、1回1回途切れている拳銃による発砲音だった。

佳奈はすぐにその銃声の正体に気付き、音の方へと走り出した。

そこにはグロック17を持つ佳奈の予想通りの人物がいた。

「龍樹！！」

「おお、佳奈。何だよこいつ、硬す」

龍樹は言葉を途中で切り、上を向いた。

ちなみに正面にいたおどろおどろは消えていた。

おどろおどろが自分のいる方へと跳んできたからである。

踏みつぶそうという魂胆なのだろう。

「うおっとー」

龍樹は後ろに転がって上手くおどろおどろの落下地点から逃げた。

龍樹のすぐ目の前にはおどろおどろの姿が。

すぐに龍樹も態勢を立て直し、グロツクを一度しまつてM870に持ち替える。

片手撃ちで1発。

だが、おどろおどろは衝撃に耐え、龍樹に向かって髪を伸ばしてきた。

相手との距離を考えて龍樹が髪を避けるのは困難だった。

「まっすっ！ー！ー」

龍樹は本能的に体を両腕で庇った。

両腕に鋭い痛みが走る。

何本もの髪が龍樹の腕に突き刺さっている。

しかし、それだけではなかった。

髪はうねうねと生物のように脈打っている。

龍樹は自分の腕から血が出てないことに気付いた。

龍樹はおどろおどろの髪に吸血されているのである。

それに気付いた瞬間、龍樹の目の前を炎の列車が通った。

左にはこちらに右腕を向けている佳奈の姿があった。

「佳奈！！」

龍樹は佳奈に叱声を浴びせた。

当の佳奈は涙目になって龍樹の方を見ている。

「だって、龍樹が、龍樹が」

「これで完全に勝ちはなくなたったわね」

いずみが刀を鞘に戻し、逃げの姿勢を示す。

切り札のはずの佳奈の火炎放射が使えないなら勝つのは無理だろう
と思い、零治も銃撃をやめた。

もはやこうなってしまうと向こうを殺すよりもこっちが逃げることを
優先するべきだろう。

ここにいる誰もがそう思った。

しかし、龍樹とさつきから戦闘を黙って見ていた流華は違った。

「早くー。こっち来てー!!」

流華は大声で佳奈たちを呼ぶ。

3人はおどろおどろの攻撃をかわしながら龍樹の元へと走る。

3人が龍樹と流華の元へ来ると、零治が文句を言った。

「何だ。とっと逃げないと大変な目に遭うじゃないか」

「そうだな。」

とりあえず、大変な目に遭わないようにまずは移動しようか」

龍樹はそう言うとおどろおどろの方に向かってスタングレネード閃光手榴弾を投げた。

突然のことだったが、佳奈たちはすぐに口を開け、おどろおどろの
方に背を向け、耳を塞いだ。

そして、閃光と爆音に辺りが包まれる。

「で、一体どうするつもりなの？ 龍樹くん」

いずみがいつもの調子で龍樹に尋ねる。

だが、心なしか言葉に怒気が含まれているかのようにも感じられる。

閃光と爆音に包まれた場所から少し離れた位置に龍樹たちはいた。

爆発したらずぐに彼らは走り出し、上手く逃げ出してきたのである。

後ろを見ずに走ってきたのでおどろおどろに効いたかどうかは分からないが、爆音を超える大きな悲鳴のような声が聞こえたので多分しばらくは足止め出来るだろう。

「まあ、まずは作戦を聞いてください」

「作戦って、龍樹はまだ勝つつもりなの？」

「ああ。もしかしたら1人くらい死人が出るかもしれないような危険な作戦だけだな」

「そんな危険なことを僕らにさせようと言うのか？君は馬鹿か？
大体、その作戦はリスクを除いて考えても確実なのか？」

「一気に質問するな零治。あいつさえ協力してくれば確実だ」

龍樹の指差す先にはあまつさえ戦闘にも参加せず、龍樹の後ろを着いてきただけの吸血鬼の姿があった。

一同が視線を彼女に向ける。

「さあさあ、この戦況をひっくり返す核弾頭こと鬼頭流華に何を期待するつもり！？」

「ああ、皆信じられないだろうけど本当にこいつが戦況をひっくり返す核弾頭だ」

吸血鬼（10）〜大きすぎて目に付かないもの〜

おどろおどろにはもう自我は残っていない。

最初に目覚めた時はあの社についていた神の言いつけ通りに動いた。

神を粗末に扱った者たちへの復讐。

当初の目的こそそうであったが、血の味を覚えてしまったおどろおどろはもはや自らの食欲の為だけにその髪を血管に突き立てる。

そして、今日はまだその食欲は満たされてない。

「おい」

突然、呼ばれておどろおどろは振り返った。

その時には眉間にM870が突きつけられていた。

吹き飛ばす体。

そして、飛んでいくおどろおどろに龍樹は容赦なくグロック17による追撃を続ける。

おどろおどろはようやく自分が撃たれたということに気付き、龍樹に向かってその髪を放つ。

龍樹はその攻撃をかわしながらゆっくりと歩を進める。

時折、一応グロックによる銃撃も混ぜるが、あの硬い皮膚に銃弾が通っていないことは承知済みだった。

龍樹はあくまでグロックは牽制として使い、おどろおどろとの距離を上手く測って左手のM870の引き金を引く。

盛大なマズルフラッシュと共におどろおどろは何度も後ろに大きく吹き飛ばされた。

おどろおどろの体には何度も風穴が開いたが、勿論すぐに再生する。

「あと300だ！」

龍樹は髪の毛をかわし、M870のスライドを引きながらまたおどろおどろへと突っ込む。

だが、ついに龍樹の右腕に髪が突き刺さった。

すぐに髪を抜くが、乱暴な抜き方だった為かどこか他の部位を傷つけたらしく龍樹の右腕から鮮血が流れ出した。

「悪い、零治こっからは頼んだ」

龍樹は出血する右腕を抑えながらその場に座り込む。

佳奈がすぐに包帯を持って龍樹に駆け寄る。

零治が龍樹たちのすぐ後ろから現れ、G11による援護射撃を行う。

龍樹は佳奈の頭を下げ、自分も流れ弾から身を守るため頭を低くする。

すぐ頭上を33ケースレス弾が通過し、佳奈が小さく悲鳴を上げる。

零治は弾切れになってもすぐにリロードをして、弾幕を張り続けた。

おどろおどろは連続した銃撃に少しずつ後ずさりを始めた。

龍樹と零治の銃撃だけでおどろおどろは随分と後ろに押された。

すぐ後ろは坂道になっており、もうおどろおどろに逃げ場はない。

「今です、いずみさん！！その坂は100もありません」

綺麗なよく通る声で零治がそう言うといずみは近くの茂みから出てきた。

すぐにおどろおどろの体に刀を突き刺すと、そのままおどろおどろを坂道に落とした。

いずみ自身も刀を持ったまま坂道を下りる。

彼女の心に後退の文字はもうない。

「えー、まずは現状の戦力確認。
9mmパラベラム弾が32発、12ゲージ弾が11発、ケースレス
弾が今セットされている分も含めて弾倉が7つ、日本刀1振り、で
流華」

「何かその中に組み込まれると腹立つんだけど」

「お前は人じゃないからな。で、後は……」

龍樹はどこかに電話をかけ始める。

いずみがいつもの調子で龍樹に尋ねる。

「どこに電話を？」

「後輩ですよ。」

「……おお、起きてたか。とりあえず、早く山の入り口を狙撃できるポイントを探せ。」

「……吸血鬼？流華は関係ねえよ、とにかく化け物が入り口から出てくるからそれを撃てよ。5分以内にな、じゃあよろしく」

電話口から何か抗議するような声が聞こえていたが、龍樹は構わず通話を終わらせた。

「ああ、直哉くんね。彼なら弾も豊富だし確かに戦力にはなるわね」

「そういうことですよ」

「で、結局流華ちゃんはどういう役回りなの？」

流華が顔をしかめる。

流華ちゃんという呼び方が気に入らなかったのだろう。

流華はいずみに抗議の視線を投げかけるが、気付いていないのかわざと気付いていない振りをしているのかいずみはニコニコ笑ったままだ。

「あいつがフィニッシュですよ。吸血鬼の能力と言えば吸血に怪力、ここまで言えば分りますよね？」

しかし、そこで零治が異議を唱えた。

「まさか、吸血鬼とはいえ女性に白兵戦をやらせる気か？
君は常識と言うものが欠如しているね。そんな奴は生きてる価値ないよ。早く死に」

いずみが零治の頭を刀の鞘で叩き、黙らせた。

「そもそも流華、お前喧嘩の経験は？」

「ゼロ」

「なら最初の策だな。安心しろ、狙撃手がしっかりしてれば死なない。
だが、重要な役どころだからな」

今のいずみの心は限りなく真っ白だ。

その心に他の考えが入り込む余地などない。

そもそも何も考えていないのだから。

いずみは自分におどろおどろの髪が刺さり、血を抜かれているのも気にせずに走り続ける。

下へ下へと山道を下って行く。

朝日の色が段々濃くなっていく。

夜明けだ。

いずみはついに山道を抜けた。

と、同時におどろおどろの体から一際多めに血が流れる。

直感で直哉の狙撃であるといずみは悟った。

すぐ近くに自分がいるのにおどろおどろにのみの確に弾痕が刻まれていく。

いずみは直哉を採用して良かったと、心の底から思い、すぐに刀を引き抜き、狙撃の邪魔にならない場所によるけながら離れて行った。

「では、問題だ。現在の状況で一番威力の高い武器は？」

佳奈が元気よく答える。

「龍樹のショットガン!!」

流華が佳奈に軽蔑の念を込めて、視線を向ける。

そして、わざと大きなため息をついて口を開く。

「この猿、馬鹿だね。ショットガンって言うてもソードオフタイプだから威力は半減してるじゃん。」

相手が人間ならまだしも妖怪だよ？ソードオフってだけでかなり効き目は違うよ。恐らく狙撃銃じゃない？」

「誰が猿って？この、吸血鬼！」

佳奈は人間様だぞ？」

「あーやる気？」

佳奈と流華は互いに睨み合っていたが、龍樹がすぐさま止めに入る。

「落ち着けて。どちらも不正解だ。
この中に『3つの凶器』ってミステリを読んだことがある人はいる
か？」

全員、黙り込んでしまった。

龍樹が頭を掻きながら、口を開く。

「当然か。まあ、俺の場合もミステリ好きの翔良に薦められて嫌々
読んだだけだからな。
ある男が死んだ。その男の死体は体中傷だらけでめっちゃめっちゃだっ
た為、凶器の特定が困難だった。
凶器の候補に挙がったのはナイフ、ロープ、拳銃の3つ。
で、結局その男を殺した凶器ってのは……………」

流華は素早くおどろおどろに近づくと、おどろおどろの体を担ぎ上げ、真上に投げる。

197

空を飛ぶおどろおどろは心なしか狼狽しているようにも見えた。

最も表情の変化など見受けられなかったが。

おどろおどろの体は硬いコンクリートの道路におよそ7mの地点から落下した。

トマトが潰れた時のような生々しい音と共におどろおどろは悲鳴を上げた。

「効いてる…！」

「分かってる。まだ油断するな」

龍樹は空に向かって9mmパラベラム弾を3発続けて発射した。

この行動は直哉への狙撃中止の合図である。

龍樹は至近距離でおどろおどろに12ゲージ弾を浴びせた。

右腕に包帯が巻かれているからかスライドを引くにも少し時間がかかる。

零治はG11の残弾で、佳奈は龍樹から投げ渡されたグロックでおどろおどろに攻撃を続ける。

「流華、もう一回頼む」

流華はさっきと同じ要領でおどろおどろを担ぎ上げた。

が、おどろおどろは生命の危機を感じたのか流華へと髪を突き立てた。

おどろおどろの髪に血液が流れ始める。

「残念でした。吸血はあたしの専売特許なんです」

流華は目を輝かせ、おどろおどろの体に齧り付く。

おどろおどろは目をカッと見開いた。

流華はおどろおどろの体の血液を全て吸い尽くすかのような勢いで血を吸い始めた。

このままでは先に血を抜かれ、殺されるのは自分だ、とおどろおどろは本能的に悟り、髪を流華の肌から引き抜く。

しかし、その隙を突いて流華はおどろおどろを真上へと投げた。

本日、2回目の不快な破裂音。

おどろおどろには最早戦意の欠片も残っておらず、その場に崩れ落ちた。

200

そこにも躊躇いなく銃弾を撃ち込む。

やがておどろおどろは痙攣を続けるだけの肉の塊になった。

しばらく静寂が流れたが、龍樹が一同にそつと告げた。

「弾残ってる奴、手挙げる」

佳奈がそつと手を挙げた。

「ちようど3発残ってる」

龍樹は佳奈にニヤリと笑いかける。

「じゃあ、とどめは本日の名狙撃手に頼むか」

佳奈もすぐにその意図を察し、空に向かって3発撃った。

その行動は狙撃再開の合図だった。

吸血鬼（11）〜帰還〜

いずみはベッドの上でゆっくりとその目を開いた。

まず左腕に違和感を覚えた。

これは点滴が刺されているからだろう。

そして、天井を見つめる。

いずみはここは翔良の地下帝国だと思っていた。

しかし、あそこの天井の色は茶色なのに対してここは白色だ。

「ここは？」

「飯島病院です」

意識せず口に出した疑問は若い女性の看護師が答えてくれた。

看護師は余程退屈だったのかいずみが起きたと知るや否や饒舌になつた。

「どうも、私は看護師の上田です。
危なかつたんですよ？この4日間。

血が足りなくて生死の境をずっと彷徨つてたんですよ。

まあ、それもあの吸血鬼の女の子のお陰ですね。彼女がすぐにここまで運んでくれたから貴方は一命を取り留めたんですよからお礼言っておいた方が良いでしょう」

「はあ、そうですね」

「でも、皮肉な物ですよ。妖怪が貴方達を助けるなんて」

「まあ……」

「それにしても吸血鬼って案外普通な感じなんですね。

もっとドラキュラみたいな感じのマントでもしてるのかと思いますし

たけど

尚も止みそうにない上田の話をいずみは苦笑しながら聞いていた。

「と、言つ訳で今日から補充要員として皆の仲間になる鬼頭流華で
ーす……！」

「ああ、うん」

流華の元気な自己紹介にも耕治は興味を示さない。

ここは補充要員専用の部屋である第一会議室。

流華は龍樹の懇願もあり、射殺は免れたが、N?の監視下に置かれためにほぼ強引に補充要員をすることになったのだ。

「ちよつと耕治くん、もっとテンション上げてこーよ」

そう言って、流華は机を力強く叩いた。

と、同時に机は音を立てて壊れた。

まるでハンマーが何かで叩き割れたかのような碎け方だった。

「おい………弁償しろよ」

ぶっきら棒に耕治はそれだけ言った。

それに対して流華は壊れた机を見てため息をついた。

「全く、何でこうなるのかな………」

「力入れ過ぎただけだろ」

耕治の冷たい態度に流華は沸々と怒りが湧いてきた。

「そついえば、他のメンバーは？」

「お前と俺で全部」

「これだけ？」

「それが？」

ついに腹を立てた流華は傍にあつたペンケースを投げつけた。

ペンケースは恐ろしいスピードで耕治の背後の壁に叩きつけられた。

耕治が絶叫する。

「殺す気か!？」

「確かにちよつと殺意湧いてたかも」

流華は平然と言つてのけ、耕治に質問する。

「てか、何でそんなに冷たいの？」

「誰が妖怪と好き好んで仕事なんかしたがるんだ？」

今度は鉄が飛んだ。

鉄は壁に突き刺さった。

その日以降、流華と耕治は一緒の部屋に集まらせてはいけないという決まりが出来た。

龍樹は翔良の地下帝国にいた。

「で、用件は？」

龍樹は台所でココアを作っている翔良の背中に問う。

「その1、Fake sixとザミエルが完成した」

「お、サンキュー。どこにある？」

「俺の机。」

あ、ついでにそこに集金袋あるからそこに金入れておいて」

龍樹は翔良の机の一番上の引き出しを躊躇いなく開ける。

そこにあったのは銃弾ではなく、恐らく違法であろうポルノ雑誌だった。

「翔良……お前、そんな趣味があったのか」

「何の話でしょうか、お客様」

「雑誌だよ、雑誌」

「ああ……一時的にね、預かってるんだよ。

やっぱり銃売るだけじゃ食ってけないからね。

副業みたいな物」

「じゃあ、この葉っぱもか？」

龍樹は何故か花瓶に活けてある見た事もない植物を手に取る。

「当たりー。結構、儲かるんだよ。

色々預かったり育てたりするだけで、そこそこ。

それと弾は上から3番目」

龍樹は本来の目的を忘れるところだった。

上から3番目の引き出しには確かに7つの弾丸が入っていた。

内6つの弾頭はクリーム色だが、1つだけ赤い弾頭が混じっている。

龍樹は集金袋に金を入れると、7つの弾丸をしばらく愛おしそうに見つめ、ポケットにしまった。

そして、耕治は続ける。

「その2、現在の状況をどう思う?」

「どづつて言われてもな……お、悪い」

耕治は龍樹の傍にココアの入ったカップを置く。

そして、龍樹の向かいに座る。

「だってよ、ゴブリンに七人ミサキにかまいたちにおとろし、おまけに吸血鬼ときたらどう考えてもおかしいだろ。それが同じ地域に立て続けに」

「まあな。でも、原因は？」

「それが分かれば苦労しないよ」

龍樹はココアにそつと口を付ける。

まだ熱かったので少しだけ口に含み、カップを置く。

「このココア売れば儲かるんじゃないのか？」

龍樹はふとそんな疑問を口にした。

実際、翔良の作るココアは絶品であると裏・風紀委員の間では言われている。

「それは考えた事なかったな。……………検討してみよう」

翔良はその案をすぐにノートに書き留めた。

書き終えると、翔良は三度口を開いた。

「その3、剛太先輩が帰ってくる」

「剛太先輩が？」

龍樹は思わず立ち上がってしまった。

それだけ驚くべきことだったからである。

飯島高校N？最後の1人三島剛太という男は風来坊のように日本各地を転々としている。

しかも彼はひどく面倒臭がり屋で使りは少ない。

その為、彼からの連絡は希少価値が高い。

「ああ、これは確実だ。

向こうからの約2カ月振りのメールだ」

龍樹は耕治の携帯の液晶を後ろから覗き込んだ。

そして、目を見張った。

姑獲鳥（1）〜三島剛太〜

「レディースアンドジェントルメン、今日はこの今井翔良の地下帝国にお集まり頂きありがとうございます！」「

翔良はいつもの商売口調でそう言って頭を下げる。

これで彼の服装が黒のタキシードとまでなったらこの部屋は欧米の金持ちのパーティと見間違うほどであった。

いつもの乱雑に物が置いてあるだけの翔良の部屋は色とりどりのテープや万国旗、そして壁の至る所に掛けられている観賞用の銃などで非日常を演出している。

しかし、この部屋の主である翔良の格好は変わらない。

制服の上から自前のエプロンを着ている接客の際の格好である。

「では、これより私今井翔良の誕生日会を始めたいと思います！」

流華の大きな歓声だけが翔良の言葉に答えた。

他のメンバーは理由は違えど皆あまり今回の誕生日会に乗り気ではなかった。

誰が合図したわけでもなく翔良は隣の部屋とこの部屋を往復し、食事を運び始めた。

事前にこの誕生日会の参加者には割り箸とプラスチックの皿が配られており、バイキング形式で食事してもらおうというのが翔良の考えだった。

この誕生日会には現在入院中のいずみは当然参加していない。

そのことでひどく落胆しているのは零治である。

彼はパーティと聞いて上から下まで新しいもの買い替えたらしくズボンにもシャツにも皺ひとつない。

しかし、この服装を見てくれる人物がいなかったのでは意味がなかった。

「流華ちゃん」

「んー？どうしたの？」

零治の作った声に対する流華の反応は薄かった。

「悪いが僕は外で食べてくるよ」

「えー、折角良い物出てくるんだから食べてきなよ」

「いいさ。それに多分この企画の真相は翔良の誕生日会なんかじゃない」

流華が「え？」と聞き返した時には零治は既に彼女に背を向けていた。

実際、彼のカンは当たっていた。

だが、そんなことは裏・風紀委員の仕事の日がまだ浅い流華、直哉、耕治の3人には分かるはずもなかった。

その中の一人、直哉も零治と似たような理由で落胆していた。

その様子を見かねて龍樹は声をかける。

「大丈夫か？」

「何で………何で佳奈先輩来ないんですか？」

消え入りそうな声で直哉はそう言う。

「確認くらいしとけよ。」

大体、あいつは俺以外のN？、特に翔良と委員長を目の敵にしているんだからよ」

「え、俺その話知りませんよ」

龍樹は口を開きかけていた。

しかし、翔良から浴びせられる刺すような視線を感じ、閉口した。

それを見て翔良は安心しきった顔で微笑み、料理を口にした。

それから一同はしばらく食事と談笑を楽しんでいた。

突如、どこからともなく調子はずれの歌が聞こえてきた。

歌詞から察するにそれはどうやら音楽の分類上ハードロックにあたるものであることが分かった。

流華と直哉は謎の歌声がだんだんこちらに近づいてくるのに気づき、警戒を強めた。

それに対して龍樹や翔良は随分と無防備だった。

耕治は自分が銃の扱いに慣れていないことは分かっていたので後ろに下がった。

部屋の明かりに照らされてついに声の主は姿を現した。

直哉がまず最初にその声の主に感じた印象は大きいのは歌声だけではなかったということだった。

身長は優に180cmを超えており、肉付きの良い男だった。

もう秋がすぐそこまで来ているというの上はランニングシャツ、下はジーパンといった出で立ちで、風邪を引かないのだろうか。

髪も髭も手入れがされておらず伸びきっており、右手に何か筒のような物を手にしている。

その筒から視線を筒を持つ右腕に移すと、そこに龍のタトゥーが彫られていることに気付く。

男はもうほとんど消えかけている煙草をジーパンのポケットにねじ込み、黄色い歯を見せて笑った。

男がヘビースモーカーだということは一目瞭然だった。

「龍樹先輩」

直哉は声を落として龍樹に話しかけた。

「どうした？」

と、龍樹は緊張感など微塵も感じさせないような口調で聞き返した。

「どうしたじゃないですよ、誰ですかあれ？」

早く銃抜いた方が」

「その必要はねえよ、兄ちゃん」

ありもしない方向から聞こえた声に直哉は短く悲鳴を上げ、声のした方を振り返った。

男は足音一つ立てずに直哉のすぐ傍まで移動していた。

直哉は恐怖を感じ、龍樹の制服のズボンのポケットに入っていたグロック17を奪い取り、男に照準を合わせた。

「あ、あんたは誰だ？何しに来た？」

上ずった声で直哉は男に尋ねる。

男は答えた。

「俺か？」

俺の名前は三島剛太^{みしま こうた}。飯島高校の3年、N？だ」

「三島………剛太？」

直哉はその名前に聞き覚えがあった。

必死に思考を巡らせ、それがいつだったかを思い出す。

あれは確かあいさつ回りの時だったという結論に直哉は辿り着いた。

「ってことは、あなたが最後の一人の……」

「そういうことになるか」

言い終わると剛太は豪快に笑った。

ひとしきり笑い終わると、剛太はぐるりと辺りを見渡した。

一人一人の顔を確認しているようだった。

「さて……知らない顔もいるが、皆いるな！
……いや、佳奈と零治とみずみの野郎がいねえか。
まあいい、久しぶりだな！俺が帰ってきたぜ！」

そこで一度言葉を切ると、剛太は翔良に目を向けた。

「そうそう。ここに来る前に一匹妖怪見つけたから殺しておいたぞ」

翔良は目を白黒させた。

「それってまさか大ムカデじゃないですか？」

「あ？知ってて放っておいたのか？趣味悪いなお前」

「あれはボディーガードとして置いておいたんですよ！
何勝手に殺しちゃってるんですか！」

「でも素手で殺せたぜ？あんな弱い置いておいたって無駄だろ」

「先輩の素手と1個中隊は同義語じゃないですか！
弁償してくださいよ、高かったんですから」

「今、金無いんだよ。」

北海道からここまで来るのに使っちゃまってさ………」

と、弁明するも翔良は今にも飛び掛かってきそうな勢いである。

「なら仕方ないか」

剛太は何の前触れもなく大きく跳躍した。

天井に頭が当たる前に彼は腕を上大きく突き出していた。

拳と天井がぶつかる。

すると天井は音を立てて崩れた。

崩れてきた瓦礫でテーブルの上の料理はぐちゃぐちゃになり、壁の銃や万国旗も地面に落ちた。

「じゃあな!!」

剛太はそう言って上の階（学校の床）に飛び降りるとどこかに走り去っていった。

「逃がすか!!」

翔良も梯子を上って剛太を追いかけてようとする。

しかし、耕治が待ったをかける。

「ちよつと待てよ、今井！」

あの化け物よりお前は早く走れるのか？」

翔良は鬱陶しそくに耕治を見やり答える。

「大丈夫だよ。あの人、力はあるけど馬鹿だから。隠れる場所は大抵決まってる！」

それから翔良は梯子を上り始めたが、ふとこちらを振り返った。

「あ、忘れてたけど直哉さんと流華には新しい武器売ってあげるから暇なら残つてて。30分以内には戻るから」

それだけ言うと翔良も梯子を上り終え、走り去っていった。

姑獲鳥（2）〜武器屋と少女〜

ジュースが受け取り口に落ちる。

それを手に取り、プルタブを引つ張り、一気にジュースの半分を飲みきり、一息入れる。

今井翔良は辺りを見渡し、人知れずため息をついた。

走行距離はおよそ1.5 km。

いつも地下帝国に閉じこもって過ごしている翔良にしては上出来である。

結局彼は剛太を捕まえるには至らなかった。

体が火照ってきたので剛太の追跡は諦めてジュースでも買おうかと考えていた矢先にこの自販機が目に入った。

翔良はジュースの残りも飲みきり、屑籠へと空き缶を捨てる。

小休止を取ってしまったのでどちらにせよもう剛太は今日中には捕まえられないだろう。

そもそも剛太がどっちに逃げて行ったか翔良にはもう知る由もなかった。

「商店街の辺りまでは豆粒程度だったけどまだ姿が見えてたんだけどな……」

言い訳するかの如く翔良は呟いた。

だが、彼の隠れ家は決まっている。
明日にでも候補地を探しに行こう。

翔良はこのまま帰るのも癪だったので久しぶりの外の空気に触れてみる事にした。

幸いにもここからそう遠くないところに娯楽施設は勿論の事、反対方向に向かえばちょっとした散歩道もある。

翔良は散歩道の方を選んで歩き出した。

しかし、彼は歩き出してすぐに、公園の脇を横切る時に歩みを止めた。

現在の時刻はちょうど6時を回ったところ。

子供たちはとつくに遊ぶのを止めて、自宅へと帰っているはずの時刻である。

そんな時刻だと言うのに小学校低学年くらいの子供がたった一人でブランコに座っている。漕いで遊んでいる訳でもなくただ座っているだけだ。

日が沈み、暗くなり始めた空とブランコに座る子供というミスマッチな組み合わせが翔良には不自然に感じられた。

翔良はさりげなく公園の敷地内に入り、子供の表情を確認した。

子供は少女であるという事が分かった。

翔良は顔つきでそう判断した。

後姿だけなら髪は短いとも長いとも言えず、服装は近隣の小学校の指定のジャージだったので男女の区別がつかなかった。

だが、顔を見れば性別など一目瞭然だった。

ぱっちりと開かれた目、長いまつ毛、ほんのりと朱に染まった頬。他にも判断基準は沢山あった。

「ねえ、お兄さん」

翔良は慌てて少女から視線を逸らす。

下手をすれば警察を呼ばれかねない程じろじろと少女を観察していた。

急いで逃げようかと思ったところに少女から質問を続けられた。

「お兄さんは何してるの？」

少女は無表情のまま尋ねる。

「俺は……その散歩に」

この年頃の子供と言うのは大人の想像を遥かに超えた鋭い勘を持っているものだ。

翔良の嘘など簡単に見破ってしまった。

「嘘。だってお兄さん散歩するはずならわざわざ遊びの方に来なくても良いじゃない」

「休憩だよ」

「その自販機の傍でさっきまでジュース飲んでベンチに座ってたのにまた休憩？」

「……君みたいな小さい子がこんな時間までそとにいちやいけないよ」

「へー、お説教する為に来たんだ」

翔良はバツが悪そうに苦笑する。

そして、そのまま彼女の隣のブランコに座る。

「お兄さんがもしかして子供を攫う不審者？」

翔良は最近この辺りで起きている連続誘拐事件を思い出した。犠牲者はついに6人目になり、妖怪の仕業では無いかとまで言われている。

「いや、違う」

「そっか。いつそのことあたしの事なんか攫ってくれば良いのにな」

「どうして？君が攫われたら君のお父さんやお母さんが悲しむぞ？」

「お父さんもお母さんも死んじゃった」

翔良は目を丸くして驚いたのに対して、少女は両親が死んだという事実を話す時ですら口調も表情も崩さなかった。

少女はそのまま淡々と語りだした。

「お父さんは妖怪に殺されちゃって、お母さんは後を追って自殺。それであたしは小学校で暮らすことになっちゃった」

「それってまさか」

「あたし達みたいなお子供のことをNo? a l u e っと呼ぶんだって」

翔良は体を大きく震わせた。

彼とて小学生にN?が居ないとは思っていなかったし、小学生N?の話は何度か聞いたことがあった。

しかし、実際に目にするのと話に聞くのとの衝撃は違った。

「お兄さんをからかおうって言うのかい?そんな都市伝説で」

「……うん。」

からかおうとしてごめんなさい」

翔良は驚きの他にもう一つ感じるものがあった。

それはこの少女には絶対に自分の正体を明かしてはいけないという緊迫感だった。

少女がもし自分の正体を知ったらどうするか?
きつと同じ境遇を生きる仲間と認識し、甘えてくるだろう。

それだけは避けなければならない。

少女の甘えによってもしかしたら自分も少女から影響を受け、依存し合う事になるかもしれない。

すると、仕事に支障を来すこともあり得なくはない。

翔良はつい口が滑ってしまうのでは無いかと不安になっていた。

「ねえ、お兄さん」

「今度は何だ？」

「さっきの続きだけでもし本当にN？みたいな人がお兄さんの目の前に現れたらどうする？」

「………さあ。」

その時になってみないと分からない」

翔良はブランコから勢いよく立ち上がった。

公園の時計で時刻を確認すると6時30分。

およそ30分も少女といた計算になる。

「お兄さん、明日もここに来る？」

少女は初めて感情を含めた声で尋ねた。

その感情はおそらく期待だろうと翔良は自分勝手な妄想をした。

「気が向いたら」

「あたし伊藤三月。3月って書いて三月。お父さんもお母さんも3月生まれだったからこんな名前なの。」

あたしは11月生まれなのに」

「俺は今井翔良。明日も来れるとしたらこの位の時間に来てやるから今日はもう帰んな」

翔良はそう言い終えて後悔した。

自分でさっき口を滑らしてはいけないと決めていたのにその危険に何故わざわざ突っ込むような真似をってしまったのだろうか？

翔良はそう思いながら一番近い地下帝国の入り口へと向かった。

「帰るのは家じゃなくて学校なんだけどね」

三月は翔良の去り際、小さくそう呟いた。

姑獲鳥（3）〜翔良の追憶〜

1年前の事だった。

姑獲鳥はたった3人の高校生に追い詰められていた。

銀の翼をはためかせ、赤い大きな目で周囲に気を配る。

夜だと言うのに追手はこちらを平気で追いかけている。

姑獲鳥の赤い両目は赤外線のような役目を果たしており、夜でも生物の動きを正確に捉える事が出来る。

その両目で追手の現在位置を確認する。

「ひっ！」

姑獲鳥の目が彼らの姿を捉えると同時に、彼女はバランスを崩した。

理由は分かっている。

3人の追手の1人が持っている狙撃銃だ。

そのまま姑獲鳥は地面へと落下した。

しばし呻いていた姑獲鳥だったが、追手の足音と話し声が近づいて

来るのに気づき、慌てて身を隠す。

足音は姑獲鳥の隠れている茂みのすぐ近くで止まった。

「死体が………無い？」

「おかしいな。確かにこの辺の気がしたんだが」

「どうするんですか。死体、或いはその妖怪の体の一部が無いと報酬は貰えませんか？」

「んな事は分かってら」

話しているのは拳銃、グロック17を持っている普通としか形容すべき言葉がない程特徴が無い少年と大きな狙撃銃を肩に担いでいる口調が荒々しい大男だ。

どうやらこの2人の関係は先輩と後輩のようなものであるらしい。

もう1人、色白の先程から一言も言葉を発しない少年はポケットの中の何かを右手で弄りながら周囲を見回している。

この少年はどうやら銃の類は持っていないらしい。

少なくとも右手はポケット、左手はゴーグルで塞がっている。

そのゴーグルが暗視ゴーグルというもので、自分の目とほぼ同じ役割である物だと姑獲鳥が知るのもう少し先の話である。

「ん？」

大男が何かに気付いたらしく、狙撃銃を構える。

普通の少年も大男の動きを見て、グロツクに新しい弾倉をセットした。

「何匹ですか？」

ここに来て色白の少年が初めて口を開いた。

「3・・・4・・・5匹。」

身を寄せ合って隠れてるみたいだな」

5匹の身を寄せ合って隠れている何か。

姑獲鳥にはそれに心当たりがあった。

姑獲鳥には子供が6匹いた。

自分が追手から逃げている間、子供たちの行方は分からない。

しかし、日頃から子供たちに自分が居ない時にはどこかに隠れていると教えたのは他でもない彼女だった。

普通の少年が隠れている5匹の元に一步一步近づく度に、姑獲鳥の心臓は苦しくなった。

姑獲鳥にはそこに子供たちがそこに隠れているかは知らない。

しかし、直感的に彼女はそこに子供たちが隠れていると知った。

姑獲鳥の母性本能が目覚めた。

自分が派手に動けば少なくとも子供たちは助かるかもしれない。そう思い、口を大きく開いた。

しかし、銀色の小さな羽がその口を塞いだ。

羽の持ち主は姑獲鳥の子供の中で長男にあたる子だった。

息子は母の口から手を放し、宙に浮いた。

3人の高校生の興味は今、他の子供たちが隠れている場所に向いている。

長い間、一緒に暮らしてきた母と息子の関係だ。

姑獲鳥にはすぐに我が子の考えが分かった。

銀色の体躯が空を舞い、3人の高校生に向かって飛んで行く。

3人とも背後からの攻撃に面喰らったようだ。

鳴り響く銃声、飛び交う奇声罵声悲鳴、そして舞い散る銀の羽。

色白の少年がポケットからようやく隠されていた物を出した。それは姑獲鳥の予想通りの物だった。

辺りに爆風と破片が飛び散った。

「……………翔良先輩、翔良先輩！！」

直哉の呼びかけで翔良はようやく我に帰った。

彼は良く赤いソファに座って良く考え事をする。

それ自体は普通の行為なのだが、彼のそれはひどく集中して行う為、辺りに注意が行き届かない事が多かった。

今回も知らず知らずの内に長時間追憶にふけていた。

「悪い悪い。ちょっと昔の事を思い出しててな」

「へー、翔良君の昔の事って何ー？」

流華が陽気に尋ねる。

「別に大した話じゃないよ。」

「1年前、妖怪を1匹取り逃がした時の話だ」

「でも、翔良先輩は現場に向く事は少ないんじゃない？」

「その時は新しく作った破片手榴弾の威力を試したくてね、龍樹と剛太先輩に着いて行ったんだよ。」

「結果は最高だった。5匹の穴倉に潜んでいた妖怪をぶっ殺したんだ」

「その妖怪って？」

「鳥の妖怪……そう、姑獲鳥だよ。」

「まあ、肝心の母親は取り逃がしちゃったんだけどね」

「そう言っつて、翔良は無理矢理笑みを浮かべた。」

彼は昨日出会った少女を思い出すと同時に1年前の姑獲鳥事件を思い出していた。

そして、今同じような事がこの辺りで起こっている。
間違いなく彼女だろう。

翔良はそう思っていた。

この考えは既に剛太と龍樹にも伝えた。

しかし、どちらもまともに翔良の話など聞いてはいなかった。

「考えすぎだろ。姑獲鳥なんてそこら中にゴロゴロいる妖怪だろ？
偶然だ偶然」

龍樹はそう言っていた。

「それより翔良君、あたし達に武器売ってくれるんでしょ？
早くしてよ」

「おっと、そうだった」

翔良はすぐに2つの台車を運んできた。

その時には彼の顔は先程の無理矢理な笑みから自然な営業スマイル
へと変貌していた。

2つの台車には流華と直哉にはびったりだろうという考えを持って
買ってきた銃が置かれていた。

「この大きいのが流華の、こっちの短機関銃が直哉君のだ」

翔良は2人に自分の銃を指し示した。

直哉はその銃をえらく気に入り、すぐに試し撃ちがしたいと言いだめたくらいだった。

翔良は直哉に奥に射撃場がある事を教えた。

直哉はすぐにそっちへ走って行った。

一方の流華はと言うと少し困惑していたようだった。

「どうしたんだ、それじゃ不服？」

「いや、不服では無いんだけどさ……あたし一応女の子だよ？」

「それが？」

「だからこんな大きい銃普通女の子に持たせる!？」

「でも、流華は男か女とか以前に妖怪だろ？」

君ならそれも使いこなせるよ」

流華はあまり納得してはいなかったようだが、渋々銃を買い取り、直哉と同じように射撃場に向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0526q/>

魔弾の射手の弾丸は何処に？

2011年11月23日13時51分発行